

令和7（2025）年度

五女子大学コンソーシアム

合同国内スタディツアー実施報告書

2026年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

令和7（2025）年度  
五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー実施報告書

目次

はじめに .....	3
1. 事業の概要 .....	5
1. 1 事業の目的 .....	5
1. 2 実施スケジュール .....	5
(1) 募集選考 .....	5
(2) 事前学習（オンライン） .....	6
(3) スタディツアー実施：2025年9月1日（月）～2025年9月3日（水） .....	6
(4) 報告会（オンライン）：2025年10月27日（月） .....	6
1. 3 実施場所 .....	6
1. 4 スタディツアー日程 .....	7
1. 5 参加者 .....	7
2. 参加者報告 .....	9
3. 訪問記録 .....	44
4. 資料 .....	51
(1) スタディツアー中の写真 .....	51
(2) オンライン報告会（10月27日）の様子 .....	55
(3) 各大学における学園祭等での活動報告 .....	57



## はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターは、国際協力・平和構築を中心とした国際的な課題に関する教育研究と、これらを通じた女性リーダーの育成、開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援とを2つの柱とし、開発途上国や国際協力の現場から学ぶ授業、大学院生の海外調査支援、幼児教育分野の人材育成のための研修、他大学と連携した活動等に取り組んでいます。これらの事業・活動は、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー」事業とその他の資金により運営されています。

本冊子は、これらの事業・活動のうち、開発途上国の女子教育支援や女子教育の発展に向けた女子大学間の連携枠組みである「五女子大学コンソーシアム」にもとづく事業の一環として、2025年9月1日～3日に実施された「五女子大学コンソーシアム合同駒ヶ根市スタディツアー」の実施記録と参加学生による報告を取りまとめたものです。

お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学から参加した15名の学生は、日本政府の国際協力実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）と連携し、海外協力隊訓練所を擁し、ネパールにおける国際協力活動、地域社会における多文化共生活動に積極的に取り組む長野県駒ヶ根市において、多くの関係機関・関係者を訪問しお話を伺うとともに、ネパール交流市民の会の皆様と現地に送る指導ツールの制作なども体験しました。個人が参加できる国際協力について深く学び、自治体の国際協力事業や多文化共生に関する活動を知ることで、地域で行う国際協力活動の在り方について理解を深め、自身の活動につなげる機会となりました。

今回のスタディツアー実施にご協力・ご支援をいただいた関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

2026年1月

国立大学法人 お茶の水女子大学  
グローバル協力センター長 由良 敬



## 1. 事業の概要

### 1. 1 事業の目的

五女子大学コンソーシアムは、日本政府のアフガニスタン復興支援において、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学が連携し女子教育支援に取り組む協力枠組みとして 2002 年に締結された。同コンソーシアムのもと、五女子大学は連携し、アフガニスタン女子教育復興のための女性教員研修を実施し、2002 年から 2012 年の間、女性教員など 169 名を受け入れた。同コンソーシアムは、2006 年より支援対象を開発途上国の女子教育に広げている。

このたび、五女子大学コンソーシアムは、日本政府の国際協力実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）と連携し、海外協力隊訓練所を擁し、ネパールにおける国際協力活動、地域社会における多文化共生活動に取り組む長野県駒ヶ根市において、五女子大学合同国内スタディツアーを開催した。実施の目的は、①海外協力隊の活動を知り、個人でできる国際協力活動について理解を深める、②地方自治体における国際協力活動や多文化共生社会への取り組みを知り、地方レベルで参加できる国際協力活動について理解を深める、③上記の 2 つの理解が深まったところで、実際に自分はどのように国際協力に携わりたいか、現段階の自分の目標を設定し、具体的なアプローチを考えてみる、④同じ関心をもつ「五女子大学コンソーシアム」の参加者とネットワークをつくる、ことである。

本スタディツアーは、アフガニスタンをはじめとする開発途上国の女子教育活動を支援するため、2012 年にお茶の水女子大学卒業生の故野々山恵美子様の遺贈を原資として設立された「野々山基金」を活用し、実施された。

### 1. 2 実施スケジュール

#### (1) 募集選考

以下の内容で各大学が募集選考を実施し、2025 年 6 月にお茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学から各 3 名、計 15 名の学生の参加が決定した。

- ① 募集時期：2025 年 6 月上旬～6 月下旬
- ② 定員：各大学 3 名まで、全体で 15 名まで（応募者多数の場合は各大学で書類・面接審査の結果を踏まえ 3 名に絞り込み）。

③ 応募資格：

- ・ 五女子大学の正規の学生（学部・大学院博士前期課程に在学中の学生）であること。
- ・ 国際協力に関心があり、健康面の支障がなく、日本語でのコミュニケーションが可能なこと。
- ・ 事前・事後の学習・オリエンテーション（基本的にオンラインでの実施）に参加可能なこと。

(2) 事前学習（オンライン）

第一回：2025年7月23日（水）

第二回：2025年8月6日（水）

(3) スタディツアー実施：2025年9月1日（月）～2025年9月3日（水）

詳細日程は「1. 4」の通り。

(4) 報告会（オンライン）：2025年10月27日（月）

2025年度第2回五女子大学コンソーシアム連絡協議会にて各大学1名の代表者による報告（発表）を実施した。参加者は、各訪問先での活動紹介や、現地で得た学び、感想についてスライドにまとめ、発表した。授業の関係で、オンライン参加できなかった津田塾大学の学生は、事前にビデオを作成した。発表順、内容については以下の通り。

- ① 全体活動報告...お茶の水女子大学大学院博士前期課程1年 袁嘉成
- ② 地球人ネットワーク in こまがね活動報告...東京女子大学4年 有賀日菜子
- ③ JICA 海外協力隊訓練所活動報告...奈良女子大学3年 田代結菜
- ④ 駒ヶ根市役所活動報告...津田塾大学3年 鉢野結、3年 樋口美玲、  
2年 杉山安杏（代読）
- ⑤ ネパール交流市民の会活動報告...日本女子大学3年 鈴木莉緒

### 1. 3 実施場所

長野県駒ヶ根市

#### 1. 4 スタディツアー日程

			東京出発組	奈良出発組	
9/1	月	11:00	集合、点呼	奈良・大阪～京都～名古屋～ 駒ヶ根	
		11:10	出発		
		15:30	ホテル到着、チェックイン	14:30頃 ホテル到着、チェックイン	
		17:30	夕飯（近隣レストラン）＋オリエンテーション		
		19:00～ 21:00	地球人ネットワーク in こまがね		
9/2	火	8:30	朝食（ホテル）		
		9:40	ホテル出発		
		10:00～ 13:30	JICA 駒ヶ根訓練所（ランチ込み）		
		14:00～ 15:00	駒ヶ根市役所		
		15:00～ 17:30	ネパール交流市民の会		
		18:30	受け入れ先関係者との懇親会（近隣のレストラン）		
9/3	水	9:30	ホテル出発		
		9:40～ 13:00	光善寺、菅の台観光・ラップアップと昼食		
		13:00	駒ヶ根 BT 経由で新宿へ出発	13:15頃 駒ヶ根 BT→奈良へ	

#### 1. 5 参加者

氏名	所属
グループ 1	
袁 嘉成	お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 M1
有賀 日菜子	東京女子大学現代教養学部数理科学科情報理学専攻 4年
杉山 安杏	津田塾大学学芸学部国際関係学科 2年
都築 知夏	奈良女子大学生活環境学部食物栄養学科 2年
岸本 唯	日本女子大学文学部英文学科 2年

グループ 2	
飯坂 美月	お茶の水女子大学文教育学部人間社会科学科社会学コース 2年
川俣 真乃	東京女子大学現代教養学部人文学科日本文学専攻 3年
鉢野 結	津田塾大学総合政策学部総合政策学科 3年
関 七夏子	奈良女子大学理学部化学生物環境学科生物科学コース 2年
鈴木 莉緒	日本女子大学文学部英文学科 3年
グループ 3	
大坪 理紗	お茶の水女子大学文教育学部人文科学科 1年
光岡 沙恵	東京女子大学現代教養学部国際英語学科国際英語専攻 3年
樋口 美玲	津田塾大学学芸学部国際関係学科 3年
田代 結菜	奈良女子大学工学部工学科 3年
岡田 彩花	日本女子大学人間社会学部心理学科 3年
引率	
宮原 千絵	お茶の水女子大学グローバル協力センター 副センター長
駒田 千晶	お茶の水女子大学グローバル協力センター アカデミック・アシスタント

## 2. 参加者報告

(1. 5の参加者リスト順)

袁 嘉成

お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻修士1年

### 1. スタディツアー全体を通じて感じたこと・印象に残ったこと

唯一の外国人留学生であり、今回のスタディツアーのリーダーとして参加した。最初はかなり緊張していたが、引率者先生やチームメンバーからの多大な支援と協力により、自己に挑戦する機会を得て、非常に充実した3日間を過ごした。

中でも深く印象に残ったのは、駒ヶ根市の方々から受けた心からの温かい優しさである。「地球人ネットワーク in こまがね」のペルー人代表アナさんから受けた励ましは、心の奥底まで響いた。懇親会で「頑張って、応援するよ」と言いながら、私を強く抱きしめてくれた瞬間は、涙が出そうになるほど感動した。「絶対ここを忘れずに、今日のことを忘れないでください」というメッセージも、今回の経験を深く心に刻み込むものとなり、一生忘れられないだろうと確信した。

深く感じたことの二つ目は、「ネパール交流市民の会」の一連の取り組みから学んだ「民際 (intercitizen)」という概念の重要性である。「国際」が国と国との交流を指すのに対し、「民際」は国境を越えた市民同士の協力・交流を意味する。同会はネパールの人々と日本の人々のさまざまな交流を通じて、お互いが元気になる・幸せなるための「民際」活動に取り組んでいる。具体的には、母子保健プロジェクトのように、専門的な知識と技術を持つ医療者による「民際協力」と、市民一人ひとりが参加する「民際交流」の双方を通じて、日本とネパール双方の幅広い人々が共に関わり、支援を行っている<sup>1</sup>。「民際」という概念の提示と実践は、異なる国や地域が対等な立場で、共通の課題解決や発展のために助け合うという、国際協力の本質的な意味合いを改めて強調し、実践していることに強い感銘を受けた。

三つ目は、学術的な理論に留まらず、実践の不可欠性を学んだことである。母子保健プロジェクトマネージャーの北原さんの活動は、私の理想とする将来像である。紹介された事例の中でも、母子健康手帳の使用開始後、現地の産婦が自分の身体の状態を把握し、自主性を

---

<sup>1</sup> 参照：<https://komagane-pokhara.jimdofree.com/活動内容/民際/>

持つようになったという事例は、セルフ・コントロールの感覚を得るといふ、眞のエンパワメントの達成を示しており印象深い。

## 2. スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

一つ目の目標、五感で自然を楽しむことは達成された。東京の蒸し暑さと異なり、駒ヶ根市の涼しい気候と澄んだ空気を全身で感じた。特に、夜間の散歩でチームメンバーと見上げた満天の星空は、筆舌に尽くしがたい美しさであり、この夏最も幸福な瞬間となった。

二つ目の目標、「異文化交流」と「多文化共生」の深い理解についても達成された。市役所での説明により、駒ヶ根市の特殊性を理解した。駒ヶ根市は、在留外国人の人口比率(2.8%)は全国平均(2.9%)<sup>2</sup>と大差はないものの、JICA 海外協力隊という特殊な施設と国際協力という視点を通じて、地域全体で国際交流と多文化共生を積極的に実践している点で、極めてユニークである。

また、市役所担当者から、「多文化共生」とは、国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築きながら、地域社会の一員として共に生きていくことだと学んだ<sup>3</sup>。3日間を通じて、多文化共生のあり方は一体どのような形なのかという問いを追求した。「地球人ネットワーク in こまがね」の安部さんによる紹介から、その実践の具体例を学ぶ中で、一つの答えを見出した。この組織が、設立当初の「支援する人、される人」という関係から、「一緒に生きる仲間」、「居場所」へと変遷した経緯は、多文化共生が「ここに住む誰もが安心して暮らせる地域を！」という目標のもと、相互の協働によって成り立つことを明確に示していた。

活動の4つの柱「日本語教室、交流、生活情報・支援、広報」は、外国籍住民と地域住民の相互理解と助け合いを促す活動であり、外国人である私自身も切実に必要性を感じるものであり、非常に有用な情報であると確信した。

最後の目標である、女性のリプロダクティブ・ヘルスとエンパワメントの国際協力の視点からの理解についても達成された。「ネパール交流市民の会」は「母子保健プロジェクト」に加え、ネパールの女性自立支援団体「女性技術開発機構」(WSDO)が生産するフェアトレード製品の販売を支援しており、社会的な苦難にある女性たちの「生きる力」を支える重

---

<sup>2</sup> 出典：出入国在留管理庁 令和6年末現在における在留外国人数、駒ヶ根市毎月人口異動調査

<sup>3</sup> 出典：多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて（総務省2006年3月）

要な手段であることを示した<sup>4</sup>。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習と研究では、国際協力や多文化共生に関する知識を深く掘り下げるとともに、ボランティア活動などを通じた実践に重きを置くことが不可欠だと認識している。知識を行動に移すことで、より多くの人々につながり、真の課題解決に貢献できると確信している。

将来的に目指すのは、文化や国籍の異なる人々の間に入り、相互理解を促進する「架け橋」のような存在である。自身の言語能力と培った知識を最大限に活用したい。特に女性のリプロダクティブ・ヘルスとエンパワーメントに関する活動に注力する。学んだ「民際」の精神を胸に、地域社会・国際社会の双方で、人々が対等な立場で幸せを分かち合える未来のために邁進する。

有賀 日菜子

東京女子大学・現代教養学部数理科学科情報理学専攻 4年

#### 1. スタディツアー全体を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この3日間、多くの方とお話をする中で外国から見た日本と日本から見た外国を、私自身が気づくことの出来なかった部分を多く吸収でき、視野が広がったと実感している。

地球人ネットワークでは、外国人住民の方々が自信を持ってご自身のことを日本語で表現する姿に感銘を受けた。初対面の私たちに「何でも聞いて下さい」と声をかけて下さる社交性が駒ヶ根市をより活性化しているのではないかと考えた。そして国際交流や協力の中心であり、私がずっと憧れていた場所のJICA駒ヶ根への訪問は有意義なものとなった。特に、ガボンで母子保健センターの助産師として働いていた女性のお話が印象に残っている。移民が多く貧富の差が激しいため、社会保険が整っていないようだ。妊婦健診と出産場所が異なり連携しておらず、医療以外での経済やインフラなど多くの問題を感じたとのことだった。一方、避妊具の種類が多く女性主体で考えられている点は日本より進んでいる。しかし妊娠や出産に対する理解が低いことから「日本で助かる命がアフリカでは助からない

---

<sup>4</sup> 参照：<https://wsdonepal.com/our-story/who-we-are/>

悔しさ」が生まれるのだ。

昨年、性について学ぶ講義を履修し日本と海外では避妊法における対策が大きく異なることを理解した。日本も性教育が遅れていると言われているが、ガボンをはじめ途上国での性教育も深刻な問題であると気づいた。欧米などでは、女性が自身でできる避妊法の選択肢が増加している。ピルが3割程度、子宮内避妊具や注射・インプラントも2割弱を占める。日本では数千円するピルの価格は、フランスでは25歳以下の処方箋がある場合、無料であったりベトナムは薬局で約100円から購入できる。さらに、避妊法に対して視覚から情報を与える活動も盛んだ。一方、国によっては宗教上避妊が良くないとされる場所もあり若年妊娠や望まない妊娠が多い。特にガボンは中絶が禁止されているため、闇市で薬をもらう事例もあるようだ。

これらを踏まえ妊娠、出産に加え“女性の避妊について社会全体で考えることへの理解を広げる”必要があると考える。フランス、ドイツやフィンランド、オランダと西洋の性教育が進んでいることを活かし世界全体で性教育に関する水準があがることを願う。

## 2. スタディツアー参加前に立てた到達目標の達成状況

私の父は、以前ODA関係で途上国発展に関わる仕事をしていた。そのため国際協力には関心があった。しかし、理系を選択し情報理学専攻に所属してからは学業に専念する中で国際協力を諦めていた。そのとき、本学主催のタイ・ワークキャンプに出会い大学2、3年生と現地で子どもたちとの交流、ボランティアワークを経験した。これらから様々な国の人と関わり「国際交流や協力について学びたい」と強く実感し、このスタディツアーに参加を申し込んだ。

そのため大学の講義等で触れない分野を学び自分のものにし、社会人という新たなステージに進んでからも国際協力を続けるための知見を深めるということが参加前に立てた大きな目標だった。

実際に協力隊員として活躍されていた方々とお話しをして、学びの輪が広がっていくことを体感した。ブラジルで日系日本語教師として働いていた方のお話の中に“真の国際協力”が隠されておりそれを見つけることができたと思う。嬉しかったことは何かを質問した際に2年間の派遣終了後、再びブラジルへ訪れたときのこと。当時、小学生で日本語学校へ通っていた子どもたちは中高校生になってそれぞれ会うことなどなくなっていたが、自身の渡航をきっかけに集まってくれたようだ。このお話を踏まえ、真の国際協力はカタチに残

るものだけでなく「人の心の中で生き続ける絆や仲間である」という答えに辿り着いた。日本語学校では、コミュニティや居場所、仲間を作りアイデンティティを学ぶことを意識し教育していたようだ。しかし現地の人々へ 2 年間という期間に限らず、永久に続く仲間の関係性までを作り上げられていたことに感激した。

今回日本語学校で教える傍ら、自費でポルトガル語学校へ行き自らコミュニティを広げ、語学力を伸ばしたお話や、貧困と呼ばれる人は 1 日を 315 円で生活していることなど体験談を含め多くの知識を与えていただいた。これから先、社会人になる私にとって国際協力を続けていくには「何事も私事として考え、行動する」ことが大切だと考える。節水・節電を心がけることやゴミやフードロスの削減など、小さなことでも日常から意識し取り組むことで変わるのではないだろうか。JICA でいただいた資料の中には、次のような文章があった。「開発途上国が抱える社会課題の解決と一緒に取り組み、その国の社会と生活の安定に貢献することが、日本と世界の平和と安定、そして繁栄につながる。」私自身が出した答えと JICA が掲げるビジョンは一致していることを確認し、参加前に立てた目標は達成できたと思う。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

私は、食品を通じて人々の生活を豊かにできる大人として働きたいと考える。そのため卒業研究は、“唐辛子の辛い成分カプサイシン”と“CH-19 甘より辛くない成分カプシエイト”の細胞膜中拡散運動の分子動力学シミュレーションで拡散特性や運動性について比較し、違いが辛さにどのような影響を与えるのか明らかにすることを目指し進めている。

今回のスタディツアーでは「飢餓と肥満の両方の問題を抱える開発途上国」があること、食品の安全を確保していく上で基本となる 5S 活動「整理・整頓・清掃・清潔・躰」も教えていただいた。これらから辛さの知覚と温度の関係を調べることは、食文化や健康面での応用へ役立つと考える。実際に香辛料の香りや辛みの風味には、食欲増進や消化促進の効果もあるため辛味成分の研究により食育や健康支援へ繋げ貢献したいと強く決意した。

最後に現地でお世話になった駒ヶ根市の方々、宮原先生、駒田さん、14 名の仲間、このプログラムに関わって下さった全ての皆様に感謝の意を表し、本報告の結びとする。

杉山 安杏

津田塾大学・学芸学部国際関係学科 2年

今回のスタディツアーでは、協力隊の活動や地方自治体の取り組みを知ることを通して、国際協力についての理解を深めることができた。そして現場での学びや人との出会いを通して、自分自身の今後の目標や姿勢についても大きな気づきを得ることができた。

参加期間：9/1～9/3

行程：

9/1 夕食後 地球人ネットワーク in こまがね

9/2 JICA 駒ヶ根訓練所 → 駒ヶ根市役所 → ネパール交流市民の会 → 懇親会

9/3 光善寺、菅の台観光、大田切川

私はもともと母の影響で地域活動に関心があり、母のような広い心で地域のため、地域にやってくる素晴らしい人々のために時間を費やしたい、「地域を活性化させる活動」に漠然と関わりたいと思っていた。そして、海外協力隊として自身が他国に訪れ、多くの教育や生活で助けが必要な人々に手を伸ばし、人生を豊かにするお手伝いがしたいと考えていた。今回のスタディツアーに参加したのはその延長で、実際に現場に行き、人に会い、自分で手を動かしてみることで、自分の考えを具体にしたかったからである。結果として、この3日間はとても濃密で、学びも感情も多く、帰ってからもずっと忘れられない体験になった。

### 9/1 地球人ネットワーク in こまがね

初日の夜に訪れた地球人ネットワークは、2006年設立、現在約202人が関わるボラン



写真1:アナさんからいただいたキーホルダー

ティア団体だった。講演会や「駒ヶ根フォーラム」など公的な活動も行いつつ、地域の外国人と日本人が自然に交わる場を作っている。そこで私は、フィリピン、ベトナム、ポルトガル出身の方や、リーダーを務めるペルー出身の高森アナさんら、多くの人と出会った。お菓子を用意して歓迎してくださった。特に高森アナさんは代表として場を温かくまとめており、私にアルファフォーレス(ピーナッツ入りのお菓子)をふるまってくれた。家庭的で落ち

着く味で、それを食べながら話すなかで自然に緊張がほぐれた。スペイン語を大学で学んでいた私はスペイン語で会話でき、そのとき「もうあなたは家族だよ」と言われて抱きしめてもらった瞬間は今でも胸が熱くなる。あの温かさは言葉だけでなく、身体で伝わるものだった。日本には感じるこのできない距離感であったが、彼女のような暖かさを見習いたい。また、日本人側の参加者や運営をしている人たちの姿勢も強く印象に残った。彼らは「支えている」という上から目線ではなく、外国人が地域に溶け込めるように寄り添っていて、現地で暮らす外国人たちが自然にここで生活している様子が見えた。小さな子どもたちが駆け回って遊ぶ姿を見て、「この子たちが日本で元気に育ってほしい」と心から思った。

## 9/2 午前 JICA 駒ヶ根訓練所

2 日目の午前は JICA 駒ヶ根訓練所を訪問した。到着時には「五女子大コンソーシアムの方々へようこそ」とプロジェクターで歓迎の



写真 2: @体育館



写真 3: いただいた資料

メッセージが映されており、とても

あたたかく迎えられた。訓練所は 72 日間で言語や実技、生活訓練を行う場で、少人数・レベル別の語学教室や体育館など設備が充実している。食事は 72 日間朝昼晩提供されるが、一度も同じメニューが出ないよう工夫され、2~3 日に一度は派遣先の料理が出るという配慮がある。実際に私もセネガルの家庭料理「チェブジェン」をいただき、栄養満点で美味し

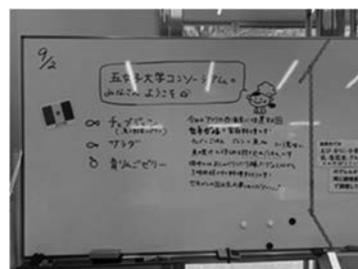


写真 4: その日の献立

かった。こうした工夫が、派遣前の不安を和らげ、胸高鳴る仕組みになっているのだと感じた。

特に訓練所の共同生活には「自室には他人を入れない」といったルールがあったが、海外での生活で自分の空間を守ることの大切さを養っている点も印象的だった。廊下に飾られた協力先の子どもたちの絵を見て、訓練所での学びと現地の人たちの生活がつながっていることを視覚的にも理解した。

また、元協力隊員の方々のお話も聞いた。話の内容は派遣先や活動目的によって本当に異なり、それが面白かった。例えば、ブラジルの日系人が多い地域の日本語学校に派遣された方は、意外にも「自分はあまり役に立てなかった」と言っていた。2 年間で成果が見えにくかつ

たのかもしれないが、その後も交流は続いているという話があり、活動の結果は目に見える形だけでは測れないと感じた。どの方も芯があり、自分の軸を持って活動している人が多かった。私もそんな人になりたいと思った。

何よりも、私が思っていたよりも、彼らは非常に身近な存在であり、きっかけ一つで自分も、彼らのように活躍できるチャンスが近くにある。

## 9/2 午後 駒ヶ根市役所 → ネパール交流市民の会



写真 5: 市役所駐車場からの景色



写真 6: 母子手帳

午後は駒ヶ根市役所で、市の国際交流やネパールとの連携について説明を受けた。午後には JICA 訓練所の井上さん（業務課長）からは、世界では水やトイレがない、文字が読めない、教育が受けられないといった現実があることを聞き、自分がどれほど恵まれた環境で学んでいるかを改めて思い知ったが、駒ヶ根では JICA の訓練所があることで外国人が集まり、地域のネットワークがで

きているという点も興味深かった。

その後訪れたネパール交流市民の会では、ポカラ市と長年の姉妹都市関係があり、それをベースに外国人材の受け入れや保健プロジェクトが進められていると聞いた。特に印象的だったのは、ネパールの新生児死亡率や母子の健康問題の深刻さだ。説明では「ネパールの死亡率が 10,000 人に 151 人」という数字が示され、私には非常に衝撃だった（日本では 10,000 人に 1 人いるかないかのレベルだと理解している）。24 時間以内に亡くなる新生児の割合が高いという話もあり、現場の切実さを強く感じた。



写真 7: 制作の様子



写真 8: 完成した作品

私たちが実際に参加したのは「おっばいプロジェクト」の一部で、母乳ケアを学ぶための“おっばい模型”の制作である。

コンソーシアムのメンバーで模型を作り、駒ヶ根で活動している女性の方々にも手伝っていただいた。制作中はみんな真剣で、でも楽しくて時間があっという間だった。完成した自分の模型がきれいに仕上がったときは、本当に嬉しかった。模型は綿などで作られ、乳房のケアの練習に使われる。適切なケアができるようになることは、乳腺のつまりを防ぎ、授

乳不全で起きる深刻な事態を避けることにつながると説明を受けた。お話をしてくれた現地経験者（ネパール人）は、このケアで「自分の子どもをおっぱいで育てられるようになった」と喜んだ事例を紹介しており、その実践的な効果に感動した。

正直、模型作りに夢中になりすぎて、詳しい説明を直接じっくり聞けなかったことは少し残念である。しかし振り返ると、手を動かすことで「自分が誰かの役に立てるかもしれない」という実感がわき、女性としての視点や命の大切さを深く感じるきっかけになった。

### 夜の懇親会・仲間との時間

夕方以降は、近隣のレストランで懇親会があり、同じ志を持つ五女子大の仲間たちと濃密な時間を過ごした。3日間という短い時間だったが、全員と仲良くなれて、別れ際に「もっと一緒にいたかった」と思うほど仲間との距離が縮まった。進路はそれぞれ異なるかもしれないが、同じ関心を持つ仲間としてこれからも関わっていきたいという気持ちが強く残った。このプロジェクトは、自身の興味があった地域活動に関する理解を深めるだけではなく、多くの宝物を見つけさせてくれた。

### 9/3 自然・文化体験（光善寺・大田切川・菅の台）

最終日は光前寺や大田切川、などを訪れ、駒ヶ根の自然や文化に触れた。朝の空気の清らかさ、川の透明さ、アルプスを望む景色、深い緑の光善寺——そうした自然は学びを支える重要な要素だと感じた。光前寺では早太郎伝説に触れ、季節によっては紅葉が美しいことも想像できた。私は駒ヶ根のこの空気



写真 9: 光前寺



写真 10: 早太郎の像

や景色に心底癒やされ、こういう場所だからこそ多文化共生や国際協力の活動が自然に育まれるのだと心から思った。

### 全体の学びとこれからの意志

このスタディツアーを通して、地方自治体や市民団体の取り組み（駒ヶ根市役所、地球人ネットワーク、ネパール交流市民の会など）は、国際協力を現実のものにし、地域レベルで人をつなぎ、支え合う仕組みになっていること。実際に手を動



写真 11: 太田切川の橋で撮影



写真 12: @菅の台

かして作ることで、理論だけでは得られない実感が得られること。おっぱい模型の制作はその最たる例で、自分で作ったものが誰かの命や笑顔につながる可能性を強く感じた。人の温かさ、地域の自然、仲間とのつながり—これらが合わさることで、国際協力は単なる「支援」ではなく「幸せの循環」になるという実感。将来、私は必ずしも国際協力に直接関わる仕事に就けるとは限らないが、教育が足りない現場や子どもたちの状況を「知り続ける」努力をやめないし、周りとその現実を共有することで危機感や関心を広げていきたい。現実から目をそらさず、学んだことを伝え続けることも一つの大切な関わり方だと考えている。今回の経験をただの思い出にしないために、自分ができることを続けていく—それが、今私が持っている強い決意である。また、今回出会った仲間たちとは今後もつながっていきたい。進路はそれぞれ違っても、同じ志を持つ者同士として励まし合い、情報を交換し合い、可能なかたちで協力し合っていきたいと考えている。入間市に戻ったら、駒ヶ根で見たような温かいコミュニティを作るために、自分にできる範囲で動きたい。地域の子どもたちを見守り、外国人住民を支えるコミュニティ活動に積極的に参加したい。そしてこのような機会をいただけたことに感謝していきたい。

## 都築 知夏

奈良女子大学・生活環境学部食物栄養学科 2年

### 1. スタディツアーを通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のスタディツアーを通して、私は国際協力に大切なこととやりがいを学んだ。

まず、JICA 海外協力隊の目的の一つには、異文化社会における相互理解の深化と共生があげられる。このお互いに理解し合うという点は大切な点であると感じた。さらに、地球人ネットワーク in こまがねの日本語学校では、日本語を教える・教えてもらうの関係ではなく日本人も文化や価値観などを教えてもらうことが多いそうだ。だからこそ、国籍関係なくみんなが一緒に生きる仲間であり、家族であると代表の方が言っていた。お互いを理解し、違いを認め合い、助け合う。この考えが国際協力の根底にあり、国際協力をするうえで大切であると感じた。

国際協力のやりがいに関しては、JICA 海外協力隊の経験者の方のお話とネパール交流市民の会の活動概要のお話を聞いた中で印象に残った。まず、私がお話を伺った 2 人の協力

隊経験者の方は、何もできなかった、もっとうまくやれたよなという感情があるようだったが、必ずそれ以上のやりがいを感じていた。やりがいとしては、コミュニティやつながりを形成できること、現地の患者や関係者と話して思いを伝え合えたことを教えてくださった。自分が貢献できていないかもという無力感を感じたとしても、少なからず何かは行った地域に還元されていて、自分にもやりがいになっているのだと分かり、双方向の利益を強く感じた。さらに、ネパール交流市民の会ではポカラ市で出産したお母さんたちの笑顔がやりがいになっていると伺った。国際協力に限ったことではないが、誰かのために何かをすることはすばらしいことだと思った。その誰かから笑顔やありがとうの言葉をもらおうと、何より自分が笑顔になれるし頑張るきっかけにもなると感じ、ここでも双方向の利益を感じることができた。

また、スタディツアーの中で特に印象に残った言葉がある。それは「幸せの循環」という言葉だ。やりがいにもつながることだが、自分の思いが、行動が、誰かの役に立って幸せだと思ってくれたら自分も幸せである。自分が幸せだと周りも巻き込んでさらに誰かの役に立ち、幸せが連鎖していく。これほど嬉しいことはないと感じた。

## 2. スタディツアー参加前に立てた到着目標の達成状況

参加前には「国際協力の意義を見つけてサークルに還元する」「自分にできる国際協力を見つけて具体化する」「国際協력에興味のある他の学生と交流することで自分の考えを深める」という3つの到達目標を立てた。

一つ目に関して、まず国際協力の意義は「ありがとう」をもらえて「ありがとう」をあげられることだと思った。その「ありがとう」は新たな別の「ありがとう」につながり、「幸せの循環」が生まれる。これらの意義をふまえて、サークルではお互いの幸せを考え、サークルを感謝し感謝される団体にしたい。サークルでは、ヘルシーな学食のメニューを考えてその学食の売り上げを途上国の子どもたちの給食費として寄付するという活動を行っている。学生は健康によい料理が食べられて、途上国の子どもたちは給食が食べられるので、一見お互いに利益を得られて幸せであるように見える。しかし、実際に幸せだと思ってもらえているかは別問題なので、利用者である学生やサークルのメンバー、機会があれば給食を食べる途上国の子どもたちに想いを聞く機会を作りたいと思う。

二つ目に関して、国際協力の中身には、先ほどのサークルの活動やネパール交流市民の会の手編み帽子のような間接的な寄付と、JICA 海外協力隊のような直接的な支援があると分

かった。間接的な国際協力としては、現在のサークルを充実させることで貢献したい。また、直接的な国際協力として JICA 海外協力隊に参加したい気持ちが強くなった。協力隊経験者の方から協力隊には行きたいと思ったときに行くべきだというアドバイスをいただいたので、大学卒業後の 20 代のうちに挑戦したい。

三つ目に関して、いろいろな考えや経験を持った学生とお話しして有意義な時間を過ごせたと感じる。どの学生にも変わらずにある思いとしては国際的な貢献に興味があり、何かしらの形で将来は国際協力に関わりたいという思いだった。どの方も温かく、高い志を持っており、刺激になった。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の抱負は 3 つある。一つ目は、国際色豊かな交流に関わることだ。地球人ネットワーク in こまがねの日本語教室では様々な国籍の日本語を話したい方々が集まっているため、その場に行くことで他の国の文化や価値観を知ることができる。国際協力の根底にあるべきであるお互いを理解し、違いを認め合うことができるのだ。なので、積極的に国際交流の場に行って視野を広げたい。二つ目は、世界の事情にアンテナを張ることだ。途上国の現状は日々変化し続けており、私は勝手に栄養不足の人が多いと思っていたが、実際は途上国の肥満も問題化していると知り驚いた。なので、そのような変化を思い込みと想像で判断するのではなく、情報収集によって知りたいと思う。三つ目は、自分自身の将来を考えて煮詰めることだ。将来は国際協力をしたいと言っても幅は広いので、しっかり考える必要がある。正直、JICA 海外協力隊に参加するのも訓練所で働くのも手編みの帽子を作ってネパールのお母さんたちにプレゼントするのも、興味がある。何をどのタイミングで挑戦するのか大学生のうちに調べて考えて、実行したい。

国際協力を意義を見つけて自ら幸せを作り出す方々や、自分の直感や興味を大切にしながら我が道を突き進む方々に感銘を受けた 3 日間だった。私も、自分が興味あることに正直になって JICA 海外協力隊として途上国の栄養改善に貢献したり、サークルの活動を充実させたりして、幸せの循環の一端を担いたいと強く感じた。今回のスタディツアーでの経験を大切に、国際協力に貢献していきたい。



写真 1:地球人ネットワーク in こまがねでいただいた世界のお菓子や料理



写真 2: JICA 海外協力隊経験者の方との交流



写真 3: ネパール交流市民の会の方のお話

## 岸本 唯

### 日本女子大学・文学部英文学科 2年

今回スタディツアーに参加させていただき、多くの施設を訪問し講話を拝聴した中で、特に印象に残ったのは地球人ネットワークの施設の在り方についてである。私の住む地域には多くのインド人が暮らしているが、インド人と地域住民を結びつける会や団体は存在しない。そのため生活情報を共有する講座も極端に少なく、お互いが不満を抱きながら関わりを避ける雰囲気形成されているのが現状である。そのような状況の中で、地球人ネットワークが多文化交流イベントを開催し、移住者の故郷の料理を作り合い、国籍に関係なく家族と呼び合える環境を築いていることに大きな関心を抱いた。会話練習を通じて現地の人と交流する機会を得ることで、移住者は意見を伝える手段を手に入れ、さらに国際交流の深化につながるのである。また、日本人とのネットワークも構築していると伺ったが、それは見知らぬ土地にやってきた移住者にとって非常に心強い支えになると考える。実際に移住者に話を聞くと、多くの方が第一に「楽しい」と答えていた。さらに、日本の性格や習慣、しきたりを学ぶことで職の確保につながり、サービス業など人前に立つ仕事に従事できるようになったとの声もあった。加えて、生活支援や出産時のサポートを受けられたとの証言もあり、その活動が地域で重要な役割を果たしていることを実感した。

私の住む地域ではインド人はインド人、日本人は日本人というように分かれて暮らしており、交流できる環境が整っていても交流を避ける選択を双方がしてしまっている。産婦人科を訪れるとインド人の来院者が多いが、言語理解の困難さから診察に時間がかかる場面も見られる。地球人ネットワークの事務局長である阿部氏のお話を伺い、このような団体が

地域にあれば良いと強く感じた。

また、ネパール交流市民の会では多くのシニアの方が活躍しており、生き生きとした姿が印象に残っている。ネパールの看護師や妊婦への国際協力は、現地の人にとっても支援する側にとっても生きる活力になっており、双方に利益をもたらす支援の形が実現していると実感した。活力に変わる活動は支援の輪を広げやすく、地域活性化に直結すると考える。特に地方では少子高齢化が深刻であるが、老人ホームや認知症予防の会での毛糸の帽子づくりや、学生による活動動画制作などが多方面に展開し、幅広い人々の参加を可能にしている。その仕組みを成立させている背景には、行政の支援と関わる人々の強い思いが存在していると感じた。私は一方的な支援には限界があると考えていたが、ネパール交流市民の会の取り組みは支援する側とされる側をともに支える現実的で持続可能な方法であると学んだ。

さらに、医療器具を送付したり施設を整備したりすることも重要であるが、母子手帳を導入し妊婦が自分の体調を容易に把握できるようにする取り組みは革新的である。看護師の知識を統一できるため、状況に応じて迅速かつ確実に最大限のサービスを提供でき、医療の質を大きく向上させると感じた。また、駒ヶ根市には JICA の訓練所があり、国際的な知識を得られる環境が整っていることから、市としても団体を支援しやすくなり、全体の幸福度の向上につながっていると考えた。私はもともと国際的な支援に関心を持っていたため、この学びは非常に充実したものとなった。



ネパール交流市民の会の講義の様子  
(写真掲載許可済み)

今回のスタディツアーにおける大きな目標は、自分の立ち位置を理解し、支援に関する知識を再確認し、どのような支援が自分に適しているのか、またどのような支援を行いたいのかを明確化することであった。その目標はおおむね達成できたと感じている。実際に話を聞くことで偏った認識を見直し、他者の意見を取り入れることによってより深い思考を重ね、ボランティアや支援について改めて向き合うことができた。ただし、限られた時間での活動であったため、すべての疑問に答えを見出せたわけではなかった。その要因として、自分自身の下調べや事前学習が十分でなかったことが挙げられる。本質的な課題には学習を深めていたが、それに付随する問題については知識が不足していたと痛感した。一方で、幅広い

視野を持ち、疑問を持ち、学習し、興味を広げていくことの重要性を実感できたのは貴重な収穫であった。

今後は支援を進める上で、どのように立ち回れば活動がより活発になるのかについて考えを深めたい。また、現在住んでいる地域で問題解決の架け橋となる団体の立ち上げや、社会福祉・教育など多様な専門分野と結びつける可能性についても検討したい。そして、慈善活動を続ける上で最も大事だと考える、双方に利益があり持続可能な支援をいかに実現するかについて探究したい。さらに、支援する側とされる側の相互理解の在り方についても考察を進める必要がある。抱負としては、今回得られた知識や学びを社会に還元できる力を培い、積極的に問題解決へと行動を起こす人間になりたい。単に活動に参加するだけでなく、企画や運営を担える人材へと成長することを目指している。

**飯坂 美月**

**お茶の水女子大学・文教育学部人間社会科学科社会学コース 2年**

今回のスタディツアーでは駒ヶ根市を訪問し、駒ヶ根に住む市民と外国人住民との共生、駒ヶ根市と姉妹都市であるネパールのポカラ市との市民レベルでの国際交流、それから JICA という日本の独立行政法人が途上国に人員派遣を行う国際協力、それぞれが異なる切り口からの「共生」について、現場を通して知る機会をいただいた。

地球人ネットワーク in こまがねでは、駒ヶ根市に住む外国人に日本語を教えるということから活動が始まったそうだが、今回の訪問に際して、海外出身の人と元々駒ヶ根に住んでいる人が、「共生」していることが肌で感じられた。私たちが訪問した日には出身地域のお菓子を作ってきてくださるなど、一方的に日本語を教えるという関係ではなく、ともに駒ヶ根に住む人として、友人として関わっているということが伝わってくるような、温かい場であった。近年日本では外国人に対する排外主義が進んでいるが、このようなコミュニティには外国人住民と日本の人々がともに生活しているという希望があるように感じられた。

また、駒ヶ根市に JICA の訓練所があることから、地球人ネットワーク in こまがねのスタッフの方や、ネパール交流市民の会のスタッフの方にも海外協力隊の OG・OB が何人もいらしたことが印象的だった。今回のスタディツアーに参加する前は、海外協力隊に参加す

のような人は非常に特別な存在であるように思われていたが、お話を聞く中で、海外協力隊として活動した方々が海外協力隊に出会ったきっかけはそれぞれであるということや、そこから一步踏み出してみる勇気があれば誰にでも開かれているということ、色々な困難がありつつも志を大切に活動していたのだということが分かり、海外協力隊が少し身近な存在となった。

今回のスタディツアーにおいて、私は当初、国際協力を行うにあたって実際に現地に赴いて行うボランティア等が主流であるが、それら以外にも、海外に行くことは難しくても日本にいながら国際協力を行うことはできないだろうかという問いを立てた。そのため、市民レベルでの交流、協力を行っている駒ヶ根の現場について知りたいという思いで今回のスタディツアーに参加した。その観点からは、ネパール交流市民の会の活動において、乳房ケアのプロジェクトでは、駒ヶ根で活動している方々が「地域にいながらにして、世界とつながっている感覚がある」と仰っていたことが印象に残っている。また、共にスタディツアーに参加したメンバーの中には、自分が住んでいる地域で外国につながる子どもたちに日本語を教えるボランティアを行っている人もおり、自分の身近なところから国際交流を行っていくことは十分に可能なことであること、そのためにも自分から機会を探したり、行動に向けて一步踏み出してみたりすることの大切さを実感した。実際に現地へ赴くことだけが国際協力ではなく、日本にいながら行えることも多くあることが分かり、国際協力に対するハードルが下がったといえる。

今後に繋げたいと感じた気づきの一つとして、ただ考えているだけでは何も変わらないが、何か行動してみることによって変化が起きるということの大切さである。地球人ネットワーク in こまがね、ネパール交流市民の会での活動に共通することとしては、一つひとつは小さな行動であっても、一人ひとりの積み重ねが大きな影響を与えることがあるということである。特に、ネパール交流市民の会では、乳房ケアや母子健康手帳の作成を通してネパールの母子を支援する活動をしていたが、市民の会の活動が実を結んでネパール国内で国家レベル、州レベルの取り組みとなっていることがそれを強く表している。国際協力では国家規模の活動が主流であるように感じていたが、自治体規模という比較的小さい関わりであっても、続けていくことの大切さを目の当たりにした。お茶の水女子大学としても学園祭での発表やネパールの手芸作品の展示、販売を企画しているが、何らかの形で関わりを続けていきたいと感じた。

一方で、市民の会では後継者となる人材の不足が課題となっているということや、NPO

法人化するかどうかのメリット、デメリットについての率直なお話も伺い、活動を継続していくことの難しさについても知る機会となった。

また、同時に、実際に国際協力に関わる上では、日本にいながら活動を行うだけではなく、実際に現場を見ることも大切であると感じた。人と人とのつながりは、直接の交流によってより強固なものとなるように思われる。特に、ネパールの方と ZOOM でお話をさせていただいたが、非常に好意的に色々なお話をしてくださったことが印象的だった。駒ヶ根市とポカラ市では人的交流の機会も用意しているとのことで、実際に相手の存在を感じられる機会を用意することで、より相手のことを身近に感じられるようになるのではないかと思った。今まで自分はなかなか海外に行く機会がなかったが、自分から機会を探して参加してみようと思った。

今回のスタディツアーを通して学んだことは、考えているだけではなく何か行動してみると、相手の存在を遠いものではなく、身近に感じるということが国際交流・国際協力において重要だということである。訪問先の方のお話に加えて、同じスタディツアーに参加したメンバーの体験を知ることができたことも、とても有意義な時間となった。

川俣 真乃

東京女子大学・現代教養学部人文学科日本文学専攻 3年

### 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のスタディツアー全体を通して印象に残ったことは、国際協力や国際交流が駒ヶ根市に生きる多くの人々の間に自然と行われ、人々の生活に溶け込んでいたことである。駒ヶ根市では、JICA の駒ヶ根訓練所をはじめとし協力隊経験者も多く居住している。そのため、国際的視野を持った方々を中心として日本に居住している外国人居住者との相互交流の重要性や、生活をする上での課題解決に取り組む活動がより活発に行われていた。今回訪問した地球人ネットワーク in こまがねでも、協力隊経験者を中心として、地域に住むすべての人が幸せに暮らせる地域づくりをモットーに日本語サポートや季節のイベントを行っていた。実際に日本人ボランティアの方々と外国人居住者の方々と交流をした中でも、誰もが笑顔を絶やすことなく一緒に時間を過ごしていた。また、それぞれのもつ固有の考えや気持ちを共有し、互いの生活を気にかけるような人情味の溢れる会話が多く行われていた。これ

らは、信頼関係を築き同じ地域に生きるすべての人々が幸せに生きることのできる社会作りに深く繋がっているように感じる。また、国際協力や交流の波は、駒ヶ根市内にとどまることなく、駒ヶ根市の国際協力友好都市協定であるネパールのポカラ市にも広がっていることも印象に残った。今回のプログラムでは、ネパール交流市民の会の皆さんと一緒に、ネパールで生きるお母さんたちを支援するための川手式乳房マッサージに使う乳房モデルの作成も行った。この活動では、実際に地域に住む市民の方々と交流をしながら作成に取り組んだ。特に活動中に聞こえた市民の会の参加者の「いろんな人がいるから、いろんなものがあっていい」という言葉が印象に残った。同じ地球に住む人間として、日本もネパールも国は違えど、同じ人間であり助け合わなければいけないという意味を含んでいる言葉だと考える。この言葉にも、地域に深く根付く国際交流の存在が非常に影響しているように感じた。このように、地域に根付く国際協力の形に驚かされるとともに、様々な活動を経験し駒ヶ根市に住む老若男女、様々な世代の方々と交流する中で、互いを思いやる気持ちや人々の暖かさも非常に印象に残ったスタディツアーであった。

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

スタディツアー参加前に「実際に行われている日本語教育の現場に参加し、そこに生きる外国人居住者のニーズを掴み日本語だけでなく、他にどのような支援方法があるか知る。」  
「地方自治体や JICA の活動など多種多様な『国際協力』のあり方を理解した上で、自身のキャリアと『国際協力』の関わり方をより詳細に可視化させ、今後に繋げていく」という二つの目標を立てた。一つ目の目標に関しては、大学で日本語教育を副専攻として学びを進めていくなかで、実際の現場に関わる機会が少なかったため、今回の地球人ネットワーク in こまがねの訪問は非常に貴重な機会であった。仕事や家族の移住など様々な理由で日本へ訪れていた外国人居住者のニーズとは、日本語支援という観点だけでなく、そこに生きる日本人の生活に溶け込めるようなきっかけやコミュニケーションの機会、そして日本と他国で生きる人々が互いに理解し合う場所を提供することであるように感じた。地球人ネットワークでは、日本語の支援という一面がある一方で、そこに参加している国籍を問わないすべての人が一つの大きな家族であるような、すべての人にとっての居場所であるような側面があった。このように、一つ目の目標は、多種多様なニーズを把握することができ、互いに心を通わせることができる機会提供、社会作りなどで日本語以外でも様々な支援方法があると実感した。

二つ目の目標に関しては、今私自身が学んでいる日本語教育の需要を、実際に現場を見たことで改めて実感したとともに、今後のキャリアにもぜひその学びと専門性を活かして私のできる「国際協力」をしていきたいと考えた。具体的には、大学生活で日本語教育そして対人コミュニケーションという観点での学びを深めるとともに、大学卒業後は、青年海外協力隊や日本国際交流基金の日本語パートナーズというような実践経験を積むことができるプログラムに挑戦し自身の能力を向上させて、より多くの日本語を必要としている人々に役立てていきたいと思う。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の学習において、自身の専攻である日本文学では、文化や伝統だけでなく日本人の性質や習慣等も学びを深めていくことで、より広範囲で外国人居住者をはじめ日本に繋がりを持つ外国の方々のサポートを行えるようなスキルを高めていきたいと思う。また、日本語教育という観点でも大学での授業での学びを身につけていくとともに、以前より参加していた地域の国際交流団体へより積極的に参加し日本語教育、外国人居住者に支援の経験を積み、人々に寄り添って支援を行えるような人材へと成長していきたい。また、学外での交流プログラム等にこれまでと同じように継続して参加をし、国や文化を超えた様々な人と交流をすることで、異文化理解をはじめとし、物事を多角的に見ることのできる視野を養っていきたいと思う。

また、今回のプログラムでは多くの学びの機会が提供されたとともに、その学びを自身の考えやキャリアと繋げていくという点で、内省的思考力の必要性に気づいた。今後においては、大学や学外での学びより自身の内省的思考力についても合わせて伸ばしていきたいと思う。

今回、幸運にもこの五女子大コンソーシアム合同国内スタディツアーに参加させていただいた。この何か目標や貴重な機会を掴みにいく行動力も忘れず、今後も多くのことに挑戦していきたい。

鉢野 結

津田塾大学・総合政策学部総合政策学科 3年

## 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

駒ヶ根市の市民が外国人と共生し、国際協力に対して高い関心を持ち、積極的に取り組んでいる姿が印象的であった。初日に訪問した「地球人ネットワーク in こまがね」では、代表の高森アナさんが「ここは日本人・外国人、先輩・後輩関係なく過ごせる居場所であり、ここにいる人たちは皆家族のような存在である」と語っており、その言葉に感銘を受けた。実際に、地球人ネットワークの方々是人種や国籍に関係なく、差別なく平等に接しており、まさに家族のような関係性が築かれていると感じた。

この団体は、事務局長の安倍さんによれば、「外国籍児童の問題や外国人住民とのトラブルを解決したい」という市民の思いから立ち上げられたボランティア団体である。市民の多文化共生や国際協力への意識が高くなければ、このような団体は発足し得なかったと考える。

また、JICA 駒ヶ根やネパール交流市民の会、市役所の職員も、それぞれが国際協力に対する強い信念を持って活動していることが伝わってきた。特にネパール交流市民の会は、2015 年から「JICA 草の根技術協力事業」により母子保健改善プロジェクトに取り組み、2023 年から今年までは母子健康手帳の導入や乳房ケアを行うフェーズ 3 に達していた。資金不足が今後の課題とされていたが、NPO 団体ではなく市民団体であることを知り、ボランティアでここまでの活動をしていることに驚きと敬意を抱いた。会員の市民が手作りした毛糸の帽子やおっぱいモデル、産後の下着などを病院に寄贈している姿勢に、ポカラ市の妊婦や乳児への深い思いやりを感じた。

さらに、駒ヶ根市役所 企画振興課の吉澤さんは、現職給付制度を利用してネパールに行政分野で海外協力隊として派遣されていた経験を持ち、帰国後もポカラ市との国際交流を提案するなど、自身の経験を市民に還元する取り組みを行っている。このような活動が、将来的に駒ヶ根出身の協力隊参加者を増やし、国際協力の輪を広げることにつながると考える。

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

スタディツアー参加前に立てた目標は、「JICA 駒ヶ根での海外協力隊経験者へのインタビューを通して国際協力についての理解を深める。自分が参加する場合、どのようなスキルを活かせるか、またそれを取得するには何をすべきかを考えるきっかけにする」であった。この目標は、スタディツアーを通して達成できたと考える。

JICA 駒ヶ根の訓練所では、ガボンに助産師として派遣されていた下村さんと、ニジェールに家政分野で派遣されていた永井さんから現地での貴重な話を伺った。専門分野がまだ定まっていない自分にとって、どの分野で参加できるかはイメージしづらかったが、懇親会でウガンダにコミュニティ開発分野で派遣されていた森さんと話すことで、協力隊への理解が深まった。

森さんは学生時代に Habitat for Humanity の学生支部で GV（建築支援ボランティア）に参加し、国際協力に興味を持ったという。新卒で銀行に就職後、協力隊に参加し、現在は JICA 駒ヶ根で勤務している。私も Habitat for Humanity の学生支部で内代表を務めており、昨夏にはカンボジアの GV に参加した。森さんと「国際 NGO の学生支部に所属し、海外派遣ボランティアに参加したことで国際協力に興味を持った」という点が共通しており、将来のキャリアパスがより具体的に描けるようになった。

懇親会で「アフリカで子どもの貧困支援をしたい」と伝えたとこ、  
「青少年活動がぴったりだと思う」とのアドバイスをいただいた。アフリカの協力隊は 20 代で行くのが最適と  
のことであり、資格がなくても参加できる青少年活動やコミュニティ開発分野をリサーチし、  
若いうちに挑戦したいと考える。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

現時点では大学院進学の前定はないが、卒業論文のテーマとして構想している「開発途上国における児童労働問題」についてさらに深く研究したいと思った場合には、大学院に進学し、途上国に赴いて現地インタビュー調査を行いたいと考えている。

また、協力隊経験者が「現地の人々の声を聞いて課題を解決するには、語学力が重要である」と述べていたため、今後は TOEIC のリスニングと文法の学習に力を入れていきたい。

## 関 七夏子

奈良女子大学・理学部化学生物環境学科生物科学コース 2 年

### 1. スタディツアーを通して感じたこと・印象に残ったこと

スタディツアー全体を通じて最も印象に残ったのは、協力隊経験者との質疑応答である。派遣先での生活や直面した困難について語られる中で特に心に残ったのは、「日本で培って

きた考えや偏見、価値観がゼロになる」という言葉であった。環境も文化も生活も何もかも異なる状況に身を置くことで、自分の当たり前が通用しなくなり、これまでの価値観が根底から揺さぶられる。そのような経験は他では得難く、まさに自分自身が 180 度変わるような体験であると強調されていた。私はその話を聞き、未知の環境に身を投じることの大きさと、それが人を成長させる力強さを改めて実感した。協力隊という制度は単なる国際協力の枠を超えて、個人が自己変革を遂げる場でもあるのだと強く感じた。

## 2. スタディツアー参加前に立てた到着目標の達成状況

スタディツアー参加前の目標は、協力隊員の方と直接話すことで将来の夢である協力隊をより具体的に考えること、そして五大学から集まった女子学生と共にツアーに参加し、分野を問わず高い志を持つ仲間と出会い、ネットワークを築くことであった。実際に協力隊経験者から派遣先での体験や価値観の変化について率直に聞くことができ、協力隊という進路を自分の将来像に重ねて考える具体的な契機となった。また、ツアーを通して他大学の女子学生と交流し、互いの夢や関心を語り合う中で刺激を受け、志を共有するネットワークを築くこともできた。以上のことから、参加前に掲げた目標は十分に達成されたと感じている。

## 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

私の将来の夢は、途上国で研究活動を行い、飢餓問題をなくすことである。特に微生物やバイオテクノロジーの分野において食料問題の解決に携わりたいと考えている。そのため今後の学習においては、生命科学や農学の基礎知識をさらに深めるとともに、研究手法や実験技術を着実に身につけることを重視したい。また、座学や実験に加えて現場の課題を理解するために、国内外でのフィールドワークや研修の機会にも積極的に参加するつもりである。スタディツアーを通じて得られた学びを出発点として、国際協力と研究を結びつけ、持続可能な食料供給の実現に貢献できる人材へと成長していきたい。



写真 1:地球人ネットワーク in  
こまがね



写真 2:駒ヶ根市役所



写真 3:JICA 駒ヶ根訓練所

鈴木 莉緒

日本女子大学・文学部英文学科3年

## 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のスタディツアーを通じて、地域に根ざした国際協力の力強さを強く感じた。まず印象的だったのは、地球人ネットワークでの活動である。日本に働きに来た外国人が、言葉や文化の違いから地域でトラブルを抱えることがあるが、地元の人々が支援することで問題解決につながっていることを知った。駒ヶ根という地域には JICA の施設があり、住民の中にも青年海外協力隊の経験を持つ人が多い。そのため、東京から離れた地方でありながら国際交流が盛んに行われていることに驚かされた。また、アフリカで活動した協力隊経験者の話は深く考えさせられた。宗教の慣習から一夫多妻制のもと、第二夫人が夫に捨てられ、劣悪な環境で出産や育児を強いられたり、望まぬ中絶を余儀なくされる現実には衝撃的であった。こうした問題をどう解決していくべきか、答えの難しさを痛感した。

また、駒ヶ根で出会ったインドネシア出身の青年の姿も忘れられない。彼は日本での生活は楽しいと語る一方で、母国へ帰るのが楽しみと笑顔で話していた。その様子は複雑な思いを抱かせた。なぜ彼が日本に出稼ぎに来なければならなかったのか、その背景を尋ねることはできなかったが、その笑顔の裏側を考えさせられた。

さらに、ネパールの市民団体との交流では、日本の母子手帳がネパールのある都市で活用され、母子のケアに役立てられていることに感銘を受けた。出産や育児に関する知識がイラスト付きで丁寧に書かれており、現地で幅広く活用されている姿は非常に印象的だった。日本の技術や仕組みが海外で人々の生活を支えていることを知り、誇らしい気持ちになった。

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

スタディツアー参加前、私はアルバイト先で出会ったバングラデシュ出身の出稼ぎ労働者の発言をきっかけに、自分がいかに恵まれた環境にいるのかを自覚した。日本では教育を受ける機会が十分に保障され、将来を自由に選択できることが当然視されているが、それは世界的に見れば必ずしも当たり前ではない。彼の言葉を通じて、発展途上国の現状を考える契機を得たことから、今回のスタディツアーでは「国規模で行われている JICA の役割や国際協力のあり方を学ぶこと」を到達目標と設定した。

実際のスタディツアーでは、JICA の施設を訪問し、青年海外協力隊の職員から直接話を

聞くことで、国際協力の仕組みや課題を基礎から理解することができた。また、ネパール市民協力団体との交流や、駒ヶ根市、地球人ネットワークの活動を学ぶ中で、国際協力が地域レベルにまで根付いている事例を知り、新たな知識と視点を得ることができた。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

国際交流とは、先進国や特定分野に強みを持つ国が、発展途上国や技術的支援を必要とする国に対して技術や知識を提供することであるのではないかと考える。一方で、日本自身も学ぶべき点や不足している技術がある場合は、日本が人材を海外に派遣して現地から学び、それを国内に還元することや、逆に外国から人材を受け入れて日本社会の発展につなげることも重要なのではないかと考える。

また、国際交流によって人々の往来が活発化し、多様性が深まることは一見望ましいように思えるが、その在り方については慎重に考える必要がある。世界平和の実現を目指して JICA が多方面で活動しているものの、均衡ある平和の実現にはまだ多くの時間と努力が必要であると感じた。

今後は、今回のスタディツアーで得た学びを基盤とし、国際協力の現場で起こっている課題や解決策についてより理解を深めたい。そして将来的には、自分も国際協力の一助となれるよう学習と研究を続けていきたい。

大坪 理紗

お茶の水女子大学・文教育学部人文科学科 1 年

#### 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

地球人ネットワーク in こまがねは、外国から移り住んで来た住民を支援したいという声や、文化や言語の違いによる生活上の課題の顕在化をきっかけに活動を開始した。初めは日本語教室や料理教室が中心だったが、学習者やボランティアの関心や特技に沿って、生活情報の提供やお祭りの開催、共同農園での野菜栽培などに活動を展開してきた。会員の方々と交流して、今では駒ヶ根市に暮らす背景に関係なく、コミュニティ活動を楽しむ場となっているように感じた。そしてネパール交流市民の会は、国際協力を一方向的な行為ではなく、双方にとってメリットになるような行為として実践しているように感じた。母子保健プロ

プロジェクトでは、ポカラ市における妊産婦と乳児の保健に関する知識の普及や医療技術向上を目指して、駒ヶ根市の住民や近隣の大学、病院、企業と連携して活動しているが、その取り組みは支援する側の駒ヶ根市にとっても、住民の社会参加や企業の社会貢献を進めることになり、良い効果が生まれていた。特に、ポカラ市で生まれる乳児へのプレゼントや医療トレーニング器具を手作りする駒ヶ根市の方々が、活動にやりがいを感じて積極的に取り組んでいる様子が印象的で、ネパール交流市民の会が目指す「幸せの循環」が実現されていると感じた。国際協力の事業において、駒ヶ根市の住民が支援する相手と可能な限り対等な立場で向き合い、楽しんで前向きに取り組んでいた点で両団体は共通していた。また、両団体とも活動の参加者の特技や駒ヶ根市周辺にある企業の商品を活かして活動を展開しており、柔軟性と駒ヶ根市らしさを兼ね備えた国際協力の事業を構築していた。さらに、JICA 海外協力隊として派遣された方々が、帰国後に派遣時の経験をもとに、スタッフやイベント運営など多様な形で駒ヶ根市における国際協力に関わっていた。派遣国での気づきや後悔を、その後の仕事や周りの人たちの国際交流など、次につなげようとする姿勢があるからこそ、脈々と駒ヶ根市と JICA の結びつきが生まれてきたのではないかと思う。協力隊経験者が引き続き駒ヶ根市の国際交流に関わることで、国際交流におけるコミュニケーション力や事業を起こして継続させる力などを駒ヶ根市に伝えていると感じた。

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

参加前に掲げた目標は「自治体や住民が国際協力に取り組む効果、課題、将来性を見つけ、どんなサポートや連携があるとより良くなるのか考える」ことであった。スタディツアーを通して、国際交流を通じた価値観の広がりや社会貢献意識の醸成など、自治体や住民主体の活動が、支援する側に与える効果を学ぶことができた。さらに、みなこいワールドフェスタや中学生のネパールへの派遣事業など、JICA 訓練所や友好都市であるポカラ市との連携が地域の特色を生み、駒ヶ根フォーラムや企業参加につながっていることも知った。一方で、資金面の課題も明らかになった。ネパール交流市民の会の母子保健プロジェクトは、JICA 草の根技術協力事業やクレア国際協力促進事業の助成金に大きく支えられており、助成金が得られない時期には活動が制限されると伺った。また、地球人ネットワーク in こまがねやネパール交流市民の会のどちらの団体も会員制をとっており、国際協力の活動への参加する人々が資金を負担している。実際には、中高生の授業での活用や企業・JICA との連携、クラウドファンディング、独自商品の販売など資金集めに工夫がなされていた。今後さらに

活動を安定させ、さらに広げるためには、広報力の強化が重要ではないかと考える。駒ヶ根市の国際協力は独自性を持つが、企業や団体との連携や友好都市との共同事業など、他の自治体が国際協力に取り組む上で参考になる取り組みが多い。他の自治体のモデルとして取り上げられることで知名度が増し、寄付の増加や他団体との連携強化につながるのではないかと考えた。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

これまで身近に国際協力に関心を持つ人は少なく、進路として現実的には考えにくかった。しかし今回、国際協力を携わる方々や同世代の学生の話聞き、多様な関わり方を知ることができたのは大きな刺激だった。私は大学で日本語教育を学び、地域の日本語教室でボランティアとして活動している。教室では教師と学習者の立場の違いが目立ち、学習者の多様性に目を向けにくいと感じていた。対照的に、地球人ネットワーク in こまがねでは、参加者が出身地に関係なく同じ住民として交流できる工夫がされており、日本語教室を生活支援だけでなく文化理解やコミュニティ活動を実践する場として活用できるのではないかと考えた。実際に、インドネシアから来日した参加者の方から、近所付き合いの文化的な違いに悩んだが、地球人ネットワーク in こまがねにおける交流を通してインドネシアとの共通性を見出して他者理解を深めた経験を伺い、その意義を実感した。私は、多文化共生社会の実現には、普段の生活の中で、他者との違いを尊重しつつ共通性を見つけようとする寛容な姿勢が肝心だと考える。それは偏見や対立を減らし、市民や地域間のパートナーシップを強化する国際協力につながるだろう。今後は、地域社会で他者理解を促進する方法について多くの事例から学び、交流の場づくりや自治体の制度に対する理解を深めながら、自分なりに多文化共生社会の構築に取り組んでいきたい。



写真1：ネパールで使われている  
実際の母子手帳



写真2：JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

光岡 沙恵

東京女子大学・現代教養学部国際英語学科国際英語専攻 3年

今回のスタディツアーでは、JICA 駒ヶ根訓練所や地球人ネットワークでの学びを通じて、国際協力と多文化共生の現場を多角的に知ることができた。特に印象に残ったのは、地域社会がどのように外国籍住民と関わり、多文化共生を実現しているのかという点である。地球人ネットワークでの活動では、年齢を超えて日本人と外国籍の方が自然に交流する様子を目の当たりにし、そこに小さな「多文化共生社会」の姿を感じた。教科書で学ぶ国際協力や政策とは異なり、住民同士の関わり合いの中に共生の土台が築かれていることを実感した。

駒ヶ根訓練所での学びも非常に刺激的であった。派遣前訓練の現場を直接見ることで、机上では得られない発見が数多くあった。例えば、障害のある方でも協力隊に参加できること、そして施設全体がバリアフリーで配慮されていることに驚いた。さらに、寮では安全確保のために「鍵を閉めること」が義務付けられており、派遣後に必要となる危機管理能力を日常の中で身につけられる仕組みにも感銘を受けた。

特に印象的だった言葉は、協力隊員が「現地のプレイヤーではなく、必要だからそこにいる存在」であるという指摘である。私はこれまで協力隊員を情熱的な「ヒーロー」のように捉えていたが、現実はもっと実務的で、現地社会の一部として役割を果たしているに過ぎないというギャップに気づかされた。また、OV（帰国隊員）の方々の進路も多様で、外交官、国連職員、大学院進学、起業、教師などさまざまであった。特に起業する人は熱意が高い方が多いらしく、私は今後、インターンを通じてOV（帰国隊員）の起業などのキャリア支援を行う予定があり、自分も高い志を持って挑戦していきたいと考えた。一方で、協力隊の経験をキャリアに直接生かしていない人もいることを知り、その意外性に驚いた。必ずしも「経験をそのまま活用すること」が全てではなく、人生の中で多様な活かし方があるという新しい視点を得た。

駒ヶ根市長との対話では、地方における国際交流の難しさと可能性を学んだ。市長は、まだ地方では外国籍住民と接する機会が少ないことを課題としつつ、ネパール・ポカラ市との長年の交流を通じて異文化理解を深め、共生を進めていきたいと語っていた。特に印象的だったのは、缶バッチのデザインやキャッチフレーズに女子大生のアイデアを採用し、若い世代の感性を地域づくりに生かしていたことである。小さな町だからこそ可能な工夫であり、「多文化共生の入口」を住民に自然に浸透させている取り組みに共感した。

駒ヶ根市の特徴として、外国籍住民が全人口の約 2.9%と全国平均に近く、永住者や定住者の割合が 45%と高い点も学んだ。市では、外国語相談窓口や多言語ホームページ、防災ハンドブック、日本語教室、ボランティア養成講座など多角的な施策が展開されていた。特に、防災や生活支援の情報を多言語で細やかに発信している点は、外国籍住民を「労働者」としてではなく「地域住民」として受け入れる姿勢の表れだと感じた。また、市民団体によるネパール市民との交流や母子手帳支援の活動から、私たちが当たり前と思っている制度や文化が、世界では必ずしもそうではないことに気づかされ、国際協力の多様性を実感した。また、地域での国際協力が国家規模の取り組みへと発展していく様子を見て、これこそが理想的な自治体の国際協力の在り方の一つではないかと感じた。

私は参加前に「外国籍の人との交流が地方でどのように行われているかを学ぶ」という到達目標を立てていた。この点に関して、駒ヶ根市や市民団体の取り組み、さらに地球人ネットワークでの実践を直接見ることによって、その目標は十分に達成されたと考えた。単なる政策や制度ではなく、地域社会の積み重ねによって多文化共生が形づくられているという理解を得ることができた。特に、外国籍住民を「労働力」としてではなく「地域の住民の一人」として受け入れる姿勢を学べたことは、外国人労働者支援に携わっている私にとって大きな気づきであった。普段の生活でどこかそこで、線引きがあると心のどこかで感じていたので、それが払拭されて非常に良かった。また支援のあり方を「対策」や「制度」として捉えるだけでなく、日常的な交流や地域文化の共有を通じて築いていく視点を持つ必要性を実感した。

今回のスタディツアーを通じて、私は「国際協力は中央政府や国際機関だけでなく、地域や市民の取り組みによって支えられている」という視点を新たに学べた。これまで私は国際協力を「大規模な政策や海外派遣」といったイメージで捉えていたが、実際には地域社会の一つひとつの積み重ねが国際協力を成り立たせているのだと理解した。現在行っている外国人労働者支援の活動を続ける中で制度的な限界を感じることもあるが、今回学んだような地域レベルでの実践を取り入れることで、課題解決の可能性は広がるのではないかと考えるようになった。

さらに、この経験は今後の学習や研究に大きくつながる。大学での異文化理解や多文化共生に関する授業においても、理論だけでなく現場の知見をもとに自分の考えを深めることができるかと推測した。また、近い将来挑戦する JICA インターンシップや企業でのキャリア支援活動においても、今回の学びを実践に結びつけたいと考える。特に、キャリアを模索す

る若者や外国籍人材に対して、単に制度や知識を伝えるのではなく、地域での関わり方や共生の在り方を共有できる人材になりたい。そのために、引き続き外国人支援の現場で実践を積みながら、学術的な探究も進めていきたい。さらに卒業論文では、この知識をなにか生かせる研究をしてみたいと思う。

最終的な将来で、こうした経験と学びを土台として、国際協力や多文化共生を推進する専門家として成長したいと感じた。将来、私は日本と海外を行き来しながら、多様な背景を持つ人々のキャリア形成や生活支援に直接携わりたいと考えている。その際に、駒ヶ根で学んだ「地域の力を活かした国際協力」の視点は必ず役立つと確信している。スタディツアーで得た学びを原点とし、志を持って今後の進路を切り拓いていきたい。また年齢、国籍に関わらず、人と関わり、助け合おうとする社会人の様子をみて、自分もいつか人と人を繋ぎ誰かの生活を豊かにできるグローバル人材になりたいと心から感じた。

樋口 美玲

津田塾大学・学芸学部国際関係学科 3年

## 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

《地球人ネットワーク in こまがね》

ペルー人の方とお話させていただいた時に、旦那さんと結婚し日本の家庭に入った際の経験談を伺ったことが印象的だった。夫の両親が厳しくて、夫が外にいる時やお正月の際に妻は家の中で仕事をしているという価値観が合わなかったため、夫にそれを伝えた。そうすると夫は『あなたにはあなたの国の価値観があるし、自分には自分の国の価値観があるから、それでも自分たちの国で良かったところを合わせて一緒に生きていこう』と言ってくれたという。国際結婚という文かと文化の異なるもの同士が一緒に生きて困難を乗り越えようとするときには、相手の意見に耳を傾けることが大切なのだと感じた。

《JICA 駒ヶ根訓練所》

まず JICA で感じたことはおもてなしの精神である。玄関を抜けるとすぐにプロジェクトマッピングで『五女子大学コンソーシアムの皆さんようこそ』という文字が目飛び込んできた。また、食堂でもメニューの紹介のところに『ようこそ』の文字が書いてあって、とてもうれしく感じた。ここは国際協力とは無縁かもしれないけれど、相手の対場に

立って何が喜ばれるかを考える気遣いが嬉しかった。

また、印象的だったのは、ニジェルへ派遣された永井さんのお話だった。国際協力を考える際にどうしても避けて通れないことは『低中所得国の子ども達は幸せじゃないのか』という議論である。今回永井さんのお話を聞いたことで自分の考え方に少しだけ変化が生まれたような気がしている。

永井さんは『低中所得国の子ども達はたしかに選べる環境にいないかもしれないが、それでもはたから見ると楽しそうに幸せそうに見える。日本は選べる環境にはあるけれど、結局個人によるところが大きく、また選ばなかったとしてもそのコミュニティの中で幸せそうに見える。かわいそうと思うのは違うと思う。』とおっしゃっていた。私は貧困に苦しんでいる子どもの数を一人でも減らしたいという目標があるが、その目標を達成する際にどこまで低中所得国に介入していいのかという問題があったり、選べる環境にいるからこそその傲慢さが出てしまっていたりすると思う。『困っている。かわいそう。』と決めつけるのではなく、相手の立場を鑑みて何を必要としているのか、そこを見極めて支援できるような人材になりたいと感じた。

他に印象的だったことは、協力隊経験者のお二人にお話を伺った際に二人とも『私の活動が実際に現場の役にたったのかについては自信がない。』とおっしゃっていたことだ。私は現在協力隊も視野に入れているが、もし自分が行く際には現場の即戦力になるような力を身につけてから渡航したいと感じた。

#### 《ネパール市民交流の会》

私が一番驚いたことは NGO/NPO とは異なる枠組みの団体がここまでネパールの支援を行えるのかという点だった。一市民としても国際協力における重要なアクターとして関われるということに衝撃を受けた。

また、母子手帳の取り組みのところでは、実際に効果が大きく出ていて、今年度からより大きなプロジェクトとして発展していく点が素晴らしいと感じた。

そして、一点疑問に感じたことは、実際の効果をどのように測るかという点である。効果として、『母子手帳を気に入っている』と答えた方がアンケートで 100% であり、受診者数が 1.5 倍になったことが挙げられていたが、当初の一番の目的は妊産婦死亡率の低下ではないかと思うので、そこにおいては数値でどのような効果があったのかが気になった。

今回の講義で『民際』という言葉を知り、市民として世界の人々と交流し繋がり

もてるすばらしさを感じた。国際協力というと自分がその場所まで行って何かをすることを想像していたので、国内にいながらも民際という形で携われることにとっても感銘を受けた。

また、ネパール交流市民の会のボランティアの皆さんと乳房ケアのためのおっぱい作りに挑戦し、その作品がネパールの妊産婦に送られると聞いて、繋がりを持たたような温かい気持ちになった。また、ボランティアの皆さんも活動を通して、作品を作る中で日本国内の地域コミュニティに居場所ができる点も大きなメリットなのではないかと感じた。



写真1:乳房ケアのために制作したおっぱい作りの過程

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

私がスタディツアー前に立てた目標は 2 つある。一つ目は、国と国を越えた民際について学ぶことである。そして二つ目は大学での学びや自学習では補えない実践的な学びを得ることだ。

私が思うに、ほぼ満足に近い形で達成できたと考えている。理由は、一つ目の目標であるネパール市民交流の会の北原さんに具体的な活動を、疑問点を残すことなく伺えたからである。また、二つ目の目標に関しては海外協力隊について体験者からお話を伺えたり、国際協力に対する考え方をたくさんの方から伺ったりすることができたからである。

よって、達成度は 90% という形にする。残りの 10% に関しては、得た知識や情報をどのように活用して将来に活かしていくかをまだ決められていないためである。これからどのように得た知識を自分のものとして使えるようになるかは、次の抱負で述べることとする。

## 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のスタディツアーで得た学びはとて多く、自身の将来のキャリアや専攻を考える上でも非常に参考になった。特に、地方自治体レベルにおける国際協力の実現を知り、日本の地方創生と低中所得国の発展の共創の可能性を知ることができた。今後の学習では、より多くの日本と国際協力を掛け合わせた事業について学びたいと思う。また、国際関係学科のため、興味関心が幅広く研究内容を絞れたわけではないが、日本やアフリカとのつながりを

より大きくし、日本の発展と両立できるような取り組みを考えるのも面白いかもしれないと感じた。今回得た学びを無駄にしないためにも、今後もより勉学に励み国際協力を通して世界中の人々に貢献できることを目標としたい。

田代 結菜

奈良女子大学・工学部工学科 3年

### 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

スタディツアーを通して最も印象に残ったことは2日目のJICA訓練所で実際に協力隊として海外に派遣された方からのお話だ。特に印象に残ったのはルワンダに派遣された方から見せていただいた選挙ポスターだ。ルワンダは世界での識字率が世界で2番目に低いいため選挙ポスターも文字が書かれておらず図がメインで書かれている。また、政党についても直感で分かりやすいようにクマ党、トラ党のように動物の絵で党の区別などをつけているとのことだった。今まで日本で生活してきて識字率について意識したことがなく、お話を聞く中で識字率が低い場合選挙などはどうするのだろうと想像していたが、実際に識字率が低い場合は絵などを使うということが想像できていても実際に絵かメインで書かれた選挙ポスターなどを見るとすごく衝撃を受けた。

また、その方が協力隊の経験から考えたこととして発展途上国にいる人と我々とでどちらが幸せなのか、という話もすごく印象に残った。日本に住む我々は、毎日水を汲みに行かなければならなかったり、電化製品が十分に使えない発展途上国の方が不便で可哀想などの感想を抱くことが多いと思うし、実際に私もそう思っていた。しかし、その方がお話ししていたが、日本では何万円もする服のオーダーメイドが現地では当たり前で安く作ってもらえたり、日本では高級料理としてのイメージがある炭火焼きも現地では電化製品での調理の代わりとして当たり前に行われている。また、鶏を夕ご飯の前に屠殺し新鮮な肉を食べられるなど日本ではなかなか目にかかることは無いような経験もしたそうだ。この話を聞いた時、私は勝手に発展途上国に生まれた場合かなり苦勞をするんだろうなと感じていたが、日本では高級とされていることも現地では当たり前で格安で行うことが出来たりなど日本の方が幸せとずっと思っていたが、現地の暮らしも我々から見てかなり恵まれているなど感じる部分はあり、勝手に発展途上国は不便、貧しいなどのイメージを抱いてい

だが、彼らの価値観と我々の価値観は違うし、可哀想という色眼鏡で見るほど大変な生活をしているのか？というように今までと意識が変わったような気がする。



写真 1: 選挙方法のポスター



写真 2: 政党などの選挙ポスター

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

今回のツアーの目標として色々な価値観を持つ人との交流を通して新たな価値観を学んだりコミュニケーション能力を身につけるといったものがあった。今回のスタディツアーは理系の学生が少なく、普段から国際系について学んでいたり、地域社会について学んでいたりする学生が多く、専門的なことを学んでいない私は非常に不安だった。また、関西からの参加ということで、東京組がバスなどである程度仲良くなってからの合流だったためコミュニティが出来ている場所でそういったことを学ぶということが非常に不安に思っていて心配だった。

しかし、ホテルで合流した班の人達は暖かく迎えてくれ、色々な話をしてくれた。次の日からの JICA の研修などでも、こういうことを学んでいるなど教えてくれたり、他にも色々な大学のことを教えてくれ、奈良女子大学にも興味を持って実際に 10 月に訪れてくれると言ったことも決まった。研修でも専門的なことを言われる訳ではなく、分かりやすく説明してくれ、興味を持ったことについて聞いても快く教えてくださった。今まで国際的なことに興味はあったが、JICA について詳しく知っていた訳ではなかったが、今回実際に協力隊として行った方の話を聞いて、留学よりも自分に合っているのかもしれないと考えが変わったし、同世代で私と違う分野を学んでいる人達との交流を通して色々なイベントの誘いであったり知ることが出来たり、実際に誘ってもらえたり色々な話を通してコミュニケーション能力も向上したと思う。今後も交流を続けていき色々なことをお互いに学んでいきたいなと思った。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今後の活動をする上で、今回の旅でかなり自分のイメージや意識が変わり新たな視点で物事を見れるようになったと思うのでそれを活かしていきたいと思った。今まで世界の発展途上国はまだ貧しかったり、きちんとした教育が受けられていない国が大半だと考えていたが、そのイメージはかなり昔のものであるということも学べた。しかし、まだ国際的なことについてあまり関わってこなかった方はこのツアーに参加する前の私のように発展途上国に対して昔のイメージを持っている人が多いと思うので、そのイメージの改善などが出来るように色々なイベントの企画等が出来れば良いなと思った。奈良女子大学には、国際系の授業で、学生たちで企画運営出来るものがあるということなので、現地の方とお話したり、今回のように協力隊で実際に現地に行った人からのお話などから発展途上国に対するイメージを変えていけるような企画をできたらいいなと思った。奈良という外国人観光客が多い場所で学んでいるからこそ、外国人と関わる機会が多いが詳しくは知らないという人も多いので、バイトなどで外国人の方と触れ合えるきっかけになるような、海外に対して新たなイメージを持って国際的なことに興味を持ってくれる人が増えるような企画を作って運営したい。

岡田 彩花

日本女子大学・人間社会学部心理学科 3年

#### 1. スタディツアー全体を通して感じたこと・印象に残ったこと

スタディツアーの訪問先のひとつとして、JICA 駒ヶ根を訪れた際の学びが特に印象に残っている。そこでお話を伺った国際協力隊 OB の方は、現地の人々はやりたいことが制限される状況の中でも穏やかに暮らしている一方で、私たちは多くの選択肢と自由を持っていると語っていた。そして「どちらが幸せなのかは一概には言えないが、自分の環境でやりたいことをやり、胸を張って自分の人生を語れるように、後悔しない選択をしていきたい」という言葉は強く心に響いた。

また、それまで私は国際協力隊に参加する人々は、特別に高い志を抱き、自分とは異なる特別な経験や生き方をしてきた人ばかりだと思い込んでいた。しかし実際には、国際協力に携わりたいという思いさえあれば、身近な動機やきっかけからでも参加の道は開かれてい

ることを学んだ。誰にでも挑戦するチャンスがあることを理解し、自分の将来のキャリアを考えるうえでの視野が大きく広がったと感じている。さらに、海外協力隊には多様な職種や活動内容が存在するため、自分に合った形で国際協力に関わる可能性も見出すことができた。

## 2. スタディツアー参加時に立てた到達目標の達成状況

参加前には「国内にいながら、個人や自治体としてどのような国際協力ができるのかを学ぶ」という目標を掲げていた。

本ツアーでは、まず「地球人ネットワーク in こまがね」を訪問し、駒ヶ根市に暮らす海外にルーツを持つ人々との交流に参加した。その中で、日本人は冷たく感じられることがあるという声を耳にした。確かに自分自身、かつてインドネシアを旅行した際には、見知らぬ人から気さくに声をかけられたり、店員やタクシードライバーとの何気ない世間話を通じて温かく迎え入れられたりした経験がある。それと比べると、日本では初対面の相手に対して一定の距離を保つ傾向が強く、この違いを実感した。こうした気づきから、海外にルーツを持つ人々が安心して暮らせる社会を築くためには、日常の中で積極的に声をかけたり、話しかけやすい雰囲気をつくったりすることも、国内でできる大切な国際協力の一端であると考えてようになった。

さらに、駒ヶ根市には「ネパール交流市民の会」という市民団体が存在し、母子友好病院を拠点にネパールの母親たちが安心して出産や産前産後ケアを受けられるよう支援している。母子手帳の配布や乳房ケアの指導に加え、オンラインを通じて現地女性と交流する機会を設けるなど、その活動は母子の健康や生活を力強く支えていた。特に印象的だったのは、地域の市民が手作りしたおっぱいモデルや手編みの帽子を現地に届ける取り組みで



写真1:地球人ネットワーク in こまがねでふるまっていた手作り伝統菓子



写真2:おっぱいモデル制作

ある。自分自身も実際に市民の方に教わりながらおっばいモデルを作成し、その過程で地域住民同士の交流が自然に生まれる様子を体験した。自らの手で作ったものが遠く離れたネパールで役立つと思うと、大きなやりがいと国際協力の実感を得ることができた。

このように、個人による小さな働きかけから、自治体を軸とした地域ぐるみの取り組みに至るまで、国内にいながら国際協力に参加できる具体的な姿を学ぶことができ、参加前に掲げた目標は十分に達成されたと考える。

### 3. 今後の学習や研究に向けた抱負

今回のツアーを通じて、国際協力は必ずしも海外に赴いて行うものだけではなく、国内においても実践できることを学んだ。地域に暮らす海外にルーツを持つ人々との交流や、自治体・市民団体による国際協力の取り組みを目の当たりにし、自分自身も日常の中で小さな一歩を踏み出せるのだと気づいた。さらに、現地の課題や取り組みについて学ぶ中で、将来的に国際協力隊のように海外で直接活動することにも関心を持つようになった。今後は、学習を通じて開発課題の背景や支援のあり方をより深く理解し、国内外の両方の視点から国際協力に携わる道を模索していきたい。

## 3. 訪問記録

### (1) 地球人ネットワーク in こまがね

- 日時：2025年9月1日（月曜日）19：00～21：00
- 面会者：事務局長 阿部さん、ボランティアの方々、外国人居住者の方々
- 内容：

今回訪問した地球人ネットワークでは、事務局長の阿部さんより事業概要と活動内容についての紹介があり、日本人のボランティア参加者と外国人居住者の方々、そして学生それぞれの自己紹介を行なった後、学生と外国人居住者との1時間ほどの交流という形での訪問であった。

地球人ネットワークとは、外国人住民と地域住民との相互理解を目的とし、①日本語教室、②他文化交流、③外国籍住民のための生活情報講座などの活動を行っている任意団体である。200名を超えるフィリピンやインドネシアなどのアジアをはじめ、南米など様々な国にルーツを持つ外国人居住者と、約30名のボランティアによって構成されており、地域に住

む全ての人が幸せであることを願い、多くの活動を行っている。駒ヶ根市には JICA 海外協力隊訓練所があり、運営の方々やボランティア参加者にも海外協力隊経験者が在籍している。そのため、日本と外国の方々の共存に伴う課題に対して、多くの人が問題意識を持ち、相互理解を深めるための活動が活発に行われていると感じた。

自己紹介では、参加した外国人住民の方々のお出身国を当てるクイズも合わせて行われ、実に多様な国々から日本に来られていることを改めて実感するとともに、リラックスした雰囲気の中で交流を深めることができた。また、参加者の方々が母国の手作りお菓子を準備してくださり、学生たちは、味覚でも遠く離れたそれぞれの国に思いを馳せながら貴重な時間を過ごすことができた。

実際の交流の時間では、学生と地域に住む外国にルーツ持つ方々が 4 人ほどのグループになって、それぞれの国の文化の紹介や日本へ訪れるきっかけや、日本へ来てからの変化、日本での生活など様々な話題について意見交換を行なった。参加した外国人居住者の方々は多様なバックグラウンドを持ちながらも、共通して駒ヶ根市を大切に感じている点が特に印象的であった。日本語をはじめとする様々な困難に直面しながら暮らす中で、駒ヶ根市ではその支援体制が整えられつつあり、さらに精神的な支えとして「地球人ネットワーク」の活動が行われていることも確認できた。外国人居住者が駒ヶ根市を深く想う背景には、同じ地域に暮らす日本人の方々の温かい行動が大きく影響していると感じられる。今回の訪問では、「地球人ネットワーク」の存在意義は非常に大きく、国籍にとらわれない地域交流の促進の必要性を肌で実感することができた貴重な機会であった。

(文責：東京女子大学 川俣 真乃)

## (2) JICA 駒ヶ根海外協力隊訓練所

- 日時: 2025 年 9 月 2 日 (火曜日) 10 : 00 ~ 13 : 40
- 面会者 : 井上さん、南澤さん、河上さん、下村さん、永井さん、蒲さん
- 内容 :

JICA 駒ヶ根訓練所を訪問し、まず訓練所の概要について説明を受け、国際協力の現場や駒ヶ根訓練所の役割を学んだ。その後、施設見学として大浴場や個室、談話室、体育館など日常生活の場に加え、緒方貞子氏に関連する記念品や歴史展示を見学し、大画面を用いた国

名クイズにも参加した。休憩を挟んだ後、協力隊経験者3名（ガボンで助産師活動、ブラジルで日本語教育、ニジェールで家政指導を行ったいずれも女性）から自己紹介を受け、その後3名中2名の方にインタビューを行った。派遣先での生活や困難、活動を支える動機、進路選択に関する話題など幅広い内容で質疑応答が展開され、終始活発な意見交換の場となった。最後に、食堂で訓練所のランチとしてセネガル料理を体験した。今回の活動を通じて、国際協力の現場で求められる心構えや、多様な価値観に適応する柔軟さの重要性を実感した。また、協力隊経験者の具体的体験談を聞くことで、理想と現実の両面を理解でき、自らの進路や将来像を考えるととても良い機会となった。施設見学や食体験を含め、青年海外協力隊の活動をより身近に感じることができた訪問であった。

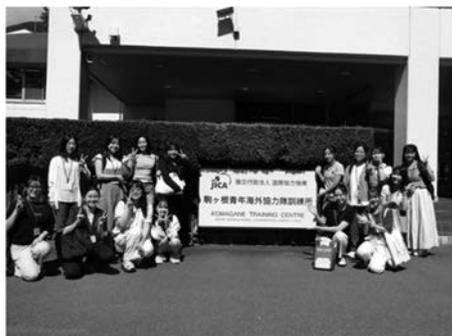


写真1: JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所前で集合写真

（文責：奈良女子大学 関 七夏子）

### （3） 駒ヶ根市役所

- 日時：2025年9月2日（火曜日）14：00～15：00
- 面会者：伊藤祐三駒ヶ根市長ならびに駒ヶ根市役所総務部企画振興課地域政策係 小池さん、吉澤さん
- 内容：

駒ヶ根市長は、地方において外国籍の方と関わる機会はまだ珍しいと指摘し、今後の課題として「外国籍の方とどのように関わるか」を挙げている。その解決策の一つとして、同市が長年取り組んできたネパール・ポカラ市との交流を活かし、異文化理解や地域社会での共生に役立てたいとの考えを示した。また、駒ヶ根市では地域のイメージづくりにも力を入れており、女子大生によって考案された缶バッチのイラストやキャッチフレーズはその象徴である。若い世代の感性を取り入れることで、地域の魅力を発信すると同時に、「多文化共

生」を住民の意識に自然に根付かせようとしている。こうした工夫は小さな町だからこそ可能であり、住民と外国籍の方が共に暮らす「入り口」をつくる役割を果たしている。

市長はまた、外国籍の方を単なる「外国人労働者」としてではなく、同じ地域に暮らす「住民」「コミュニティの一員」として受け入れることが重要であると強調した。

駒ヶ根市の外国籍市民は 867 人で、在留外国人の人口比では、全国平均の 2.9%や長野県平均の 2.05%と比較しても同程度、もしくはやや高い水準である。さらに、そのうち永住者や定住者、日本人の配偶者等が全体の 45%を占めており、全国平均よりも高い比率で長期定住が進んでいることが特徴である。これは、外国籍市民を地域の一員として受け入れる環境が整いつつあることを示している。

市はこうした状況を踏まえ、生活支援、防災、日本語教育、地域交流など多角的な施策を展開している。生活基盤整備としては外国語相談窓口を設置し、英語・中国語・ポルトガル語などに対応している。市ホームページも 5 か国語に翻訳され、今後は「やさしい日本語」での情報発信を強化する方針である。生活に直結する情報の多言語化も進み、下水道使用の注意をポルトガル語で、育児相談をベトナム語で提供するなど、きめ細かい対応が行われている。

防災分野では、やさしい日本語や英語、中国語、ポルトガル語、ベトナム語、タガログ語で記載された防災・感染症対策ハンドブックを作成し、市ホームページで公開している。さらに、防災講座や多言語支援センター運営訓練を通じて、有事の際に外国籍市民が取り残されない体制づくりを進めている。

教育・交流の分野では、日本語教室の支援などを定期的実施し、令和 6 年度には延べ 30 名が参加した。加えて、多文化共生ボランティア養成講座も行い、地域住民が外国籍市民と交流しながら共生を支える基盤を広げている。さらに、駒ヶ根市の大きな地域資源である JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所を活用した国際交流が展開されている。市民団体「駒ヶ根協力隊を育てる会」は、訓練生や帰国隊員と市民をつなぎ、市民の国際理解を促進してきた。また、市民団体「ネパール市民の会」は、母子保健や奨学支援など具体的な協力活動を続けている。2001 年にポカラ市と友好都市提携を結んで以来、市民レベルでの交流や中学生の派遣プログラムも実施され、幅広い世代に国際的な視野を育んでいる。

(文責：東京女子大学 光岡 沙恵)

#### (4) ネパール交流市民の会

- 日時：2025年9月2日（火曜日）15：00～17：30
- 面会者：駒ヶ根市市民団体ネパール交流市民の会 プロジェクトマネージャー 北原さん、ネパール交流市民の会のみなさま
- 内容：

駒ヶ根市役所において、ネパール交流市民の会の皆様から活動内容についてご教授いただきました。駒ヶ根市とネパールは2001年に国際協力友好都市として提携し、以来親交を深めてきた。ネパールでは医師や病院の数が極めて少なく、通院の利便性も十分でない。そのため、妊婦が病院に到着する前に出産してしまうことや、妊娠健診を受けないまま出産を迎えることが少なくない。日本のように医療設備が整っていないことから、乳児死亡率および妊産婦死亡率はきわめて高い水準にある。1歳未満の乳児死亡率は日本が1,000人に2人であるのに対し、ネパールは1,000人に23人にのぼる。妊産婦死亡率も日本が10万人に5人であるのに対し、ネパールでは10万人に258人となっている。この状況を改善するため、2008年に母子保健プロジェクトが開始された。第一段階では救急車や医療器材を送付し、2013年には草の根・人間の安全保障無償資金協力を基盤として母子友好病院が設立された。2015年には技術移転を進めるとともに、ネパールのボランティア団体と協議を重ね、妊婦への聞き取り調査も実施された。その結果、妊娠に関する知識不足や十代での早期結婚の実態が明らかとなり、駒ヶ根市では市民全体でポカラの現状改善に向けて意見を出し合った。こうした取り組みにより、小学生から高齢者まで幅広い市民が交流に関わるようになり、2016年にはポカラ市の人々を駒ヶ根市で歓迎した。さらに、両市の友好関係10周年にはポカラの人々により記念ソングが制作され、喜びが表現された。

母子友好病院では、駒ヶ根市の院内研究支援のもと出産や育児に関する知識提供が行われた。ネパール交流市民の会では民際協力を大事にしているということ伺った。特に母子手帳の導入は大きな成果であり、日本の母子手帳を参考にすることで妊婦と看護師双方の知識の均質化が図られた。実際に母子手帳があることで妊娠中の食生活に気を遣うようになり、妊婦側の支援につながるだけでなく、政府側にもその存在を示すことができている。さらに、日本から助産師を派遣して母乳マッサージの指導やおっぱいモデルの制作にも取り組んだ。このモデルは乳房の回旋動作を再現できる構造となっており、母乳育児の普及に大きく役立っている。今回はこのモデルの制作に携わることができた。交流市民の会の皆様の御協力のもと制作したおっぱいモデルは実際にネパールで使用されるということであり、

貴重な経験となった。

質疑応答では、ポカラ市の友好病院の看護師とオンラインでつながり、母子手帳の利便性や活動の成果について直接意見を伺うことができた。今回の交流を通じて、国際協力のあり方や市民団体の果たす役割について深く学ぶことができた。

(文責：日本女子大学 岸本 唯)



## 4. 資料

### (1) スタディツアー中の写真









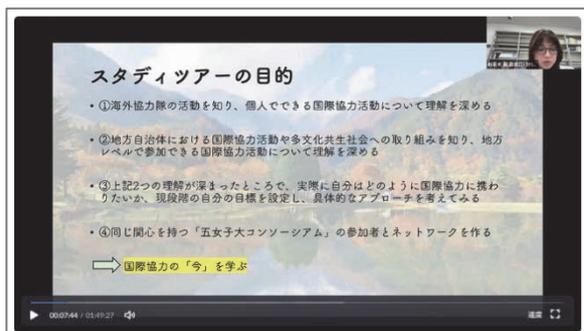
## (2) オンライン報告会 (10月27日)の様子

9月1日から3日に長野県駒ヶ根市で実施された、五女子大学の学生15名による合同国内スタディツアーの成果報告会が、10月27日(月曜日)に各大学の代表者によってオンラインで行われました。

報告会では、学生たちがスタディツアーを通して地方自治体や地域住民による国際協力・多文化共生の取り組みに触れ理解を深めたこと、また、同じ関心を持つ他大学の学生との交流を通じネットワークを形成できたことが報告されました。

発表後の質疑応答では、国際協力や多文化共生に関して、学生が多くの学びを得たという印象を受けたとの感想が寄せられました。スタディツアー中にはオンラインを繋いでネパールの関係者と意見交換をする活動も行われましたが、それに関連して「現場ではなくリモートでも学びは得られると思うか」という質問がありました。これに対し学生からは、オンラインで現地の様子を知るという体験も重要である一方、今回のように、実際に現場に足を運ぶことで感情が動かされ、学びがより深まったという回答がありました。

学生たちが「会う」機会を大切にしていることから、本スタディツアーが貴重な体験であったことがうかがえる報告会となりました。



### ①全体活動報告

袁嘉成(お茶の水女子大学大学院

博士前期課程1年)



### ②地球人ネットワーク in こまがね

活動報告

有賀日菜子(東京女子大学4年)



③ JICA 海外協力隊訓練所活動報告

田代結菜(奈良女子大学 3 年)



④ 駒ヶ根市役所活動報告

(※事前録画)

樋口美玲(津田塾大学 3 年)、

鉢野結(津田塾大学 3 年)



⑤ ネパール交流市民の会活動報告

鈴木莉緒(日本女子大学 3 年)

(3) 各大学における学園祭等での活動報告

・お茶の水女子大学 (学園祭でのポスター発表)

# 国際協力の「今」を学ぶ

大学院ジェンダー社会科学専攻 M1  
袁 嘉成

五女子大学コンソーシアム  
国内スタディツアー in 駒ヶ根



- お茶の水女子大学  
Ochanomizu University
- 津田塾大学  
TSUDA UNIVERSITY
- 東京女子大学
- 奈良女子大学  
Nara Women's University
- 日本女子大学  
JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

2025/9/3 菅の台水と文化の森公園で撮った集合写真



地元住民の方々と一緒におっぱい  
モデルの作製を体験した。




学びと感想



国際交流市民の会

**民際 = 市民 x 市民の交流**

異と自との交流を「国際(international)」と言うように、異質を越え互に異人同士が交流を「民際(民間国際)」と書きます。ネパール交際市長の命題ネパールの人々と日本人のさまざまな交流を通じて、お互いが元気になる、幸せなるための「民際」活動に取り組んでいます。

この活動は、他の多くのプロジェクトと一緒に実施する機会が多いためです。専門的な知識と技術を持つ経験者による「民際協力」と、市民一人ひとりが参加する「民際交流」の双方を兼ねて、日本とネパールの幅広い人々が共に繋がり、交流を行っています。

**主な活動**

- ◆ポカラからの市民新聞局や本邦新聞社に奉じた方たちとの民際交流会
- ◆公民館活動をする女性たちとネパール料理教室
- ◆中学生海外派遣事業交流事業
- ◆手作りの出張紙プレジント

URL : <https://komagane-pokhara.jimdofree.com/> 活動内容 / 民際 /

今後の学習と研究

- ・将来的に目指すのは、文化や国籍の異なる人々の間に入り、相互理解を促進する「架け橋」のような存在である。
- ・自身の言語能力と培った知識を最大限に活用したい。特に女性のリプロダクティブ・ヘルスとエンパワメントに関する活動に注力する。
- ・学んだ「民際」の精神を胸に、地域社会・国際社会の双方で、人々が対等な立場で幸せを分かち合える未来のために邁進する。



# 駒ヶ根スタディツアーで学んだこと

文教育学部人間社会科学科 2年

飯坂 美月

## 駒ヶ根スタディツアーでの体験

・『「共生」を知る』

長野県駒ヶ根市で行われている多文化共生に係る取り組みについて知る機会となりました。排外主義が進む現在において、お互いを隣人として理解しようとし続ける活動に触れ、非常に励まされました。

\*キーワード\*

- ・身近な存在としてとらえること
- ・行動してみること
- ・つながりを保つ

## 三つの共生

駒ヶ根で行われていた多文化共生の代表的な取り組み

- ・地域でのコミュニティづくり  
「地球人ネットワークinこまがね」
- ・国際協力の現場  
「JICA駒ヶ根訓練所」
- ・海外の姉妹都市交流  
「ネパール交流市民の会」

## 地球人ネットワークinこまがね

地球人ネットワークinこまがねは、駒ヶ根に住む日本人が在日外国人の日本での生活をサポートすると同時に、共に駒ヶ根に住む人として交流するコミュニティです。

■ コミュニティの温かさ

訪問時には出身地域のお菓子を作ってくださいなど、一方的に日本語を教える関係ではなく、友人として関わる温かい場であることが感じられました。外国人住民と日本の人々がともに生活している希望がありました。

## JICA駒ヶ根訓練所

青年海外協力隊の派遣前訓練を行う施設です。

■ 特別な存在から身近な存在へ

「地球人ネットワークinこまがね」「ネパール交流市民の会」で出会った方々の中にも海外協力隊OG・OBの方々がいたことから、それぞれが海外協力隊として活動することになったきっかけと一歩踏み出す勇気の大切さ、派遣後の国内での活動の可能性を知りました。

■ 誰にでも開かれた機会

困難がありつつも志を大切に活動する姿勢から、国際協力は特別な人だけのものではないと実感しました。

## ネパール交流市民の会

ネパール交流市民の会の乳房ケアプロジェクトでは、駒ヶ根市民の方によるネパールの母子健康に対する支援が行われています。

■ 遠隔での支援

直接現地に赴くことが国際協力であると考えられがちですが、この例では「地域にいながら世界とつながっている感覚」を実現しています。

■ 団体としての持続していくことの難しさ

このプロジェクトは長期的に行うことが大切ですが、ボランティアの市民団体として活動するなかで、後継者の不在や予算不足が課題となっています。

## 今後に向けての学び

- ・異なる存在である相手を身近な存在としてとらえること  
助ける/助けられるの関係性に規定するのではなく、共に生きる人として関わろうとすること。
- ・何か行動してみること  
自分の身近なところから国際交流を行っていくことは十分に可能なことであること、そのためにも自分から機会を探したり、行動に向けて一歩踏み出してみたりすることが大切である。
- ・つながりを保ち続けること  
一つひとつは小さな行動であっても、その積み重ねが大きな影響を与えることがある。

# 地域社会における国際協力の効果

文教育学部人文科学科1年  
大坪 理紗

## スタディツアー参加の動機

「国際協力学」のALH課題で、地域社会からの国際協力について調査

- 自治体や地元企業のノウハウや技術が国際協力で活用される
- 資金・人材不足が課題
- 地域社会で研修を実施することで、より専門的な技術の習得が可能になるのではないか
- 国際交流や非常時の連携など、地域の活性化につながるのではないか

## スタディツアーの全体像

### 目標

自治体や住民が国際協力に取り組む効果、課題、将来性を見つけ、どんなサポートや連携があるとより良くなるのかを考える

### 活動内容

- 各所訪問
  - 地球人ネットワークinこまがね
  - JICA駒ヶ根訓練所
  - ネパール交流市民の会
- 他大学の学生との交流

### 振り返り

- 目標の達成状況
- 自分の国際協力との向き合い方
- 今後の抱負

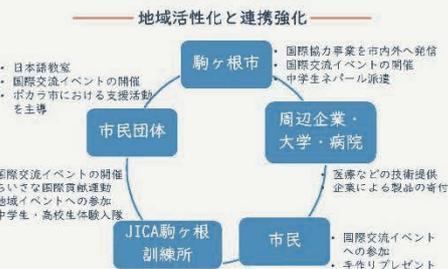
## 地域社会における国際協力の効果

多様な文化や価値観に触れる機会の多さ

- |   |   |
|---|---|
| <b>地球人ネットワークinこまがね</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>会員の出身地の文化をテーマに交流</li> <li>日本語教室</li> <li>外国籍住民のための生活情報講座</li> </ul> | <b>ネパール交流市民の会</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>ボカラ市との間で中学生や医療関係者の派遣</li> <li>ボカラ市とオンライン交流</li> <li>医療研修道具や乳幼児・妊産婦へのプレゼントを手作り</li> </ul> |
|---|---|

偏見の解消・包摂性の向上 → 「幸せの循環」  
他者理解の促進と社会貢献意識の醸成

## 地域社会における国際協力の効果



## 課題と将来性

- |    |   |
|----|---|
| 課題 | <b>資金面の不安定さ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>助成金を受け取れない時期は活動の幅が制限される</li> <li>年会費で活動が支えられている</li> </ul>     |
| 対応 | <b>広報力の強化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>SMSの運用</li> <li>市外イベントへの出展 等</li> </ul>                          |
| 改善 | <ul style="list-style-type: none"> <li>他の自治体の参考になる</li> <li>駒ヶ根市の外から活動に関わる人が増加</li> <li>企業や大学、他の自治体との連携が拡大</li> </ul> |

## 今後の抱負

### スタディツアーで印象的だったこと

- JICA派遣員や市民団体の人々が国際協力の活動に生き生きと取り組んでいた
- 支援する・支援される立場を越えて共に楽しく交流していた

### 今後の抱負

- 自分が活動する日本語教室を、教師と学習者の立場の違いを越えて対等な目線で文化交流や協働を楽しむ場にしていきたい
- 国際協力で自分らしく関わる道を模索していきたい

・津田塾大学（駒ヶ根市スタディツアーと津田ヶ谷祭ポスター展示の報告）

津田塾大学 鉢野結・樋口美玲・杉山安杏

11月22日（土）・23日（日）に開催された津田ヶ谷祭にて、「駒ヶ根市スタディツアー」のポスター展示を行いました。このスタディツアーは、五女子大学コンソーシアムの一環として実施され、津田塾大学からは3名の学生が参加しました。

「駒ヶ根市スタディツアー」は、長野県駒ヶ根市における国際協力活動や多文化共生社会への取り組みを知り、理解を深めることを目的として実施されました。ツアーでは、JICA駒ヶ根や駒ヶ根市役所、ネパール交流市民の会、地球人ネットワーク in こまがねなど、さまざまな国際協力の担い手を訪問しました。これらの訪問を通じて、駒ヶ根の市民が積極的に国際協力や多文化共生活動に取り組んでいる様子を学ぶことができました。

津田ヶ谷祭に向けて、私たちはツアーでの学びや体験をまとめたポスターを作成し、参加者の1人が所属するボランティアサークル「Umeson-Habitat」のブースにて、共同で展示を行いました。ポスターには、印象に残った出来事や駒ヶ根での体験をまとめた動画も掲載し、QRコードを通じて自由にご覧いただけるようにしました。

当日は、駒ヶ根市に何度も訪れたことがあるという来場者の方ともお話しする機会があり、JICA駒ヶ根や地球人ネットワークで学んだ外国人との共生や国際協力についての経験を共有するなど、非常に有意義な交流の時間となりました。ポスター展示や来場者の方々との対話を通して、スタディツアーでの経験を改めて振り返り、学びをより深めることができました。国際協力に関心を持つ来場者の方々と直接お話しする中で、地域に根ざした国際協力のあり方や、多文化共生を身近な問題として考える重要性を実感しました。また、JICA駒ヶ根や地球人ネットワークで学んだ内容を、自分たちの言葉で伝えることで、理解が一層深まったと感じています。

今回のスタディツアーおよびポスター展示で得た学びを今後の学修や活動に生かし、駒ヶ根市や五女子大学コンソーシアムとのつながりを大切にしながら、身近なところから自分たちにできる国際協力や社会への関わりを継続していきたいと考えています。



JICA 駒ヶ根訓練所にて海外協力隊経験者との質疑応答

・日本女子大学（大学ウェブサイトでの報告）

（※日本女子大学ウェブサイトから本文抜粋）

[https://www.jwu.ac.jp/unv/jwu\\_times/2025\\_1119\\_01.html](https://www.jwu.ac.jp/unv/jwu_times/2025_1119_01.html)（2026/1/7 最終閲覧）

### **長野県駒ヶ根市に根付く国際協力・多文化共生を見聞する**

日本女子大学は、お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学とともに、発展途上国の女子教育などに関する取り組みを共同で実施する「五女子大学コンソーシアム」を締結しています。同コンソーシアムは、9月1日（月）から3日（水）の3日間、ネパールにおける国際協力活動に取り組む長野県駒ヶ根市で「国内スタディツアー」を実施しました。

今回のスタディツアーには、書類選考および面接を経て選ばれた各大学3名、計15名の学生が参加しました。参加者は、駒ヶ根市におけるさまざまな国際協力の取り組みを見学するとともに、「国際協力」に関心を持つ学生同士の交流を深めました。

長野県駒ヶ根市は、日本政府の国際協力実施機関であるJICA（独立行政法人国際協力機構）と連携し、海外協力隊の訓練所を有しています。こうした背景から、同市は2001年にネパールのポカラ市と「国際協力友好都市」を締結しました。また、その締結に先立つ1998年には、市民団体「ネパール交流市民の会」が発足し、両市の市民による交流が長年続けられるなど、国際協力・国際交流が非常に盛んな地域として知られています。

今回のツアーには、本学から参加した3名のうち、文学部英文学科3年の鈴木莉緒（すずきりお）さんと、同学科2年の岸本唯（きしもとゆい）さんのお2人に、ツアーの内容や印象についてお話を伺いました。

### **盛りだくさんな3日間で、国際協力を自分事に**

—今回のスタディツアーに参加しようと思ったきっかけを教えてください。

鈴木さん：私のアルバイト先には外国人スタッフが多く、その中の1人が「日本の大学生は勉強しなさすぎる。せっかく大学に行ける環境があるのに！」と話していたことがありました。

彼は大学に進学できず、10代の頃から日本で働いています。日本では教育を受ける機会が十分に保障されていますが、それは世界的に見れば決して当たり前ではありません。彼の言葉を通して、発展途上国の現状について考えるようになり、今回のスタディツアーに応募

しました。

岸本さん：私が参加を決めた理由は、ツアーのテーマの一つが「ネパールにおける妊産婦と幼児の支援」だったことです。以前から YouTube などを通して、ネパールの女性や女兒が置かれている厳しい状況を知っていたため、現地でどのような支援活動が行われているのに関心がありました。

また、幼い頃から東南アジアを旅行する機会が多かったのですが、華やかなホテルの外には物乞いの人や、働く小さな子どもの姿があり、発展途上国の現実についてもっと深く学びたいと思っていました。

—3 日間のスタディツアーで、特に印象に残っていることを教えてください。

鈴木さん：2 日目の午前中に訪問した JICA の訓練所で、実際に海外協力隊として 2 年間活動された方々のお話を伺ったことが印象に残っています。

お話を伺ったのは、アフリカで活動されたお 2 人で、1 人は助産師として、もう 1 人は家政・生活改善（裁縫や料理などの技術指導）のために派遣されたそうです。

助産師の方からは、「アフリカの一部の国や地域では一夫多妻制があり、裕福でない家庭の第二夫人や第三夫人は、出産や育児のための資金がなく、自己中絶を選ばざるを得ない場合もある」と伺い、大きな衝撃を受けました。

また、家政・生活改善に携わった方は「2 年間、なかなかうまくいかなかった」と語られていました。裁縫技術を教える中で、日本とアフリカの衣服の違いや、現地の伝統技術を尊重しながら日本の技術を伝える難しさを感じたそうです。そのお話を通して、国際協力の奥深さと難しさを改めて実感しました。

さらに、JICA 職員の方から「将来的に国際協力に携わりたいと思ったときには、さまざまな関わり方があります」とアドバイスをいただいたことも印象に残っています。

岸本さん：2 日目の午後に訪問した「ネパール交流市民の会」での交流が特に印象的でした。実際にネパールで働く助産師の方とオンライン (Zoom) でお話しする機会があり、「どんなことに困っているのか」「日本の支援がどのように役立っているのか」などを直接伺うことができました。

また、参加者全員で「おっぱいモデル」と呼ばれる教材を作成しました。これは助産師や

看護師が出産後の乳房ケアを学ぶ際に使用されるトレーニング用モデルです。ネパールでは乳腺ケアの知識がまだ十分に浸透しておらず、母乳を与えられなくなったり、母体に悪影響が及んだりするケースもあると知り、驚きました。私たちが作った「おっぱいモデル」は、実際にネパールに届けられるそうです。

—今回のスタディツアーの経験を、今後どのように生かしていきたいですか？

鈴木さん：駒ヶ根市には JICA の施設があり、市全体で国際協力に取り組んでいる地域であることを実感しました。

同じように国際協力に関心を持つ他大学の学生と 3 日間をともに過ごし、JICA での活動を目指している人や、すでに国際協力を積極的に関わっている人から刺激を受け、新たな視点を得ることができました。

JICA は 65 歳まで参加できると伺ったので、まずは身近なところから国際協力に関わり、いずれは JICA でも活動してみたいと思います。

岸本さん：初日に訪問したボランティア団体「地球人ネットワーク in こまがね」は、地域に住む外国人と日本人がお互いの理解を深めることを目的に活動している団体です。

もともとは、外国人住民が地域のルール（ごみ出しなど）を知らず、地域住民との間にトラブルが生じたことをきっかけに、「どうせなら一緒に仲良くやっ払いこう」と立ち上げられたそうです。実際に外国人住民の方に話を聞くと、ルールを“守らない”のではなく“知らなかった”だけだったと分かったそうで、コミュニケーションの大切さを改めて感じましたし、団体の皆さんが口を揃えておっしゃっていた「私たちは家族（ファミリー）」という言葉も印象的でした。

私の住む地域にもインド出身の方が多いのですが、“共存”はしていても“共生”には至っておらず、お互いに“知らない者同士”といった関係です。私の地域にも「地球人ネットワーク」のような団体があればよいと思いましたし、可能であれば自分から立ち上げてみたいと感じました。

このスタディツアーを通じて、同じ地域に暮らしているながら外国の方を“外の人”と見ていた自分に気づかされ、自分自身を見つめ直すきっかけにもなりました。

---

---

令和7（2025）年度五女子大学コンソーシアム  
合同国内スタディツアー実施報告書

2026年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax : 03-5978-5546

Email : info-cwed@cc.ocha.ac.jp

---

---

令和7（2025）年度

五女子大学コンソーシアム合同国内スタディツアー実施報告書



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University